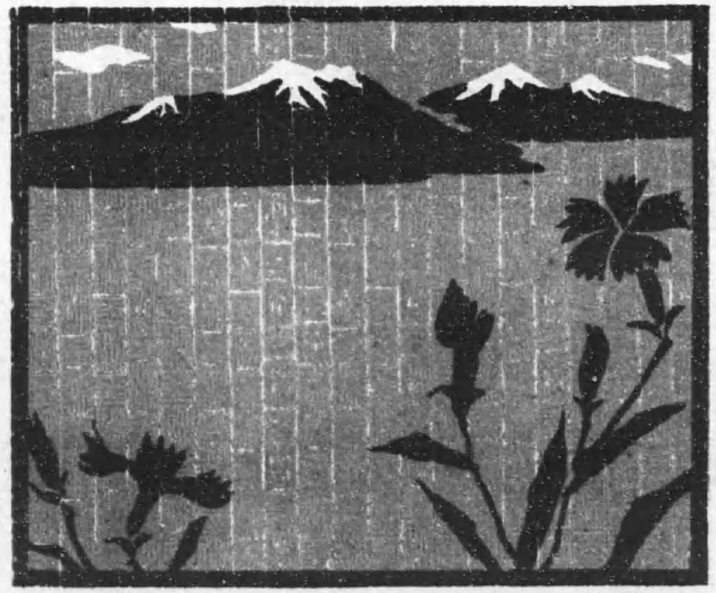
特217
198

入田原讀本

納本



始

特217
198

大田原讀本

はしがき

郷土を知り郷土を愛することはやがて國を知り國を愛することである。而してこの精神がすなはち郷土のために盡くし、國のために働くところの原動力となるのである。

わが大田原町は栃木縣北部に於ける最も主要なる都邑であつて、長き歴史を有すると共に將來益々發展すべき情況にあることはまことに喜ばしく思ふ。

われらは忠良なる國民となるために、善良なる町民とならな

ければならぬ。善良なる町民たるためにはよく町を知らなければならぬ。町を知り町を愛し、益々善き町とし、住みよい町となさうとすることは、卽ち國家のために盡くし國運發展のために役立つことになるのである。

大田原讀本は、是の意義に於て、わが小學校兒童をして大田原町を知らしめんとするものである。

昭和十年十月

學校長　鈴木陽吉

凡例

一、本讀本は尋常五年以上の兒童の課外讀物として編輯したものである。

一、本校職員一人一文として書いたのであるから文體等に於て區々たるものあるのは止むを得ないことゝ思ふ。

一、寫眞等を挿入したかつたのであるが次ぎの改訂の期に讓ることゝした。

一、文の内容については事實の正確を期したけれども或は過誤なきを保し難いと思ふこれらについては後日の改訂を期してゐる。

一、文章の記述等についても兒童の讀解に便なるやう注意したが更に使用の情況を見て改訂を施したいと思ふ。

大田原讀本

目次

第一課　大田原神社……一
第二課　大田原城……四
第三課　公園の櫻……八
第四課　さげ魚……一三
第五課　大田原町役場……一五
第六課　遠足……一八
第七課　那須與一……二一
第八課　松並木……二四
第九課　方言の話……二六
第十課　大田原町……三一

第十一課　時の鐘……三四
第十二課　大田原停車場……三七
第十三課　不退寺……四〇
第十四課　昆虫……四四
第十五課　大田原郵便局……四八
第十六課　戊辰の役と大田原……五二
第十七課　城址に立ちて……五六
第十八課　金燈籠……五九
第十九課　蛇尾川……六二
第二十課　精靈送り……六六
第二十一課　火力發電所見學……六九
第二十二課　乃木神社……七二
第二十三課　那須野原……七五

第二十四課　和歌と俳句……八〇
第二十五課　聖蹟……八一
第二十六課　飛行機……八三
第二十七課　職業の話……八七
第二十八課　城鍬踊……九二
第二十九課　招魂社……九四
第三十課　大原田小學校の歴史……九六
第三十一課　金枝柳村……九九
第三十二課　甚兵衛と狐……一〇一
第三十三課　專賣所……一〇八
第三十四課　成田山……一一四
第三十五課　金融の話……一一七
第三十六課　藥師堂……一二一

第三十七課　青年學校……一三三
第三十八課　氷切り……一三七
第三十九課　大田原の今昔……一三〇
第四十課　町民の覺悟……一三三

大田原讀本

大田原尋常高等小學校編

第一課　大田原神社

大田原町の東北方にあたり、老杉の生ひ茂つてゐる大きな丘は、上の山と言ひ、大田原神社の鎮座し給ふところである。

大田原神社ははじめ大田原藩主大田原備前守資清氏が、大田原城を築いた時、城中に、大己貴命と少彦名命の二神をまつたのである。

その後人々の參拜の便をはかつて神社を城の東の麓にうつしたが、更に蛇尾川の流域が變つたことから中田原の中宮といふところに遷し、溫泉神社と稱したのである。

溫泉神社はその後名を改めて、大田原神社と申すことな

り。明治十年には鄕社に列し、その位置があまりにかたよつてゐるので明治三十七年にいたり、大田原町字北町の愛宕神社と合祀して社殿や社務所を造營し、現在の場所に遷座されたのである。

更に明治三十八年には八雲神社、稻荷神社を合祀し、明治四十年には神明宮を合祀し、明治四十三年には淺間神社と狩野村石林の溫泉神社を合するにいたつた。

是に於て大田原神社の祭神は、前に記した二神の外に、大日靈女貴命・木花開耶姫命・火產靈神・稻倉魂神・素盞嗚尊・大山祇命の六神を加へ、合せて八座の神々をお祀りしてあるのである。

大正二年一月には神饌幣帛料供進の神社に指定せられ、毎年九月十五日の例祭及び二月十七日の祈年祭十一月二十七日の新嘗祭には供進使の參向があり幣帛を供せられるので

ある。

今や大田原神社は境内一万三千四百三十三坪の廣大なる神域を有し、氏子は二千戸に餘り、大田原町の氏神として、またわれらの產土神として、宏大無邊の御恩德を垂れさせ給ふのである。

我が日本國は神國であるわが國民は古來、神を尊崇し、神の御恩德を感謝し之に報い奉らんことをつとめてゐるのである。

われらは大田原町の氏神であるところの大田原神社の御恩德に依つて生れまた日々の生活をなしつゝあるのである。是の御恩德に感謝し奉り一層奮勵努力して善き町民となり善き日本國民となり、以て是の御恩德に報い申し上げなければならぬのである。

新鮮（あたらしい）
甦る（生さかへる）

第二課　大田原城

僕は今日學校から歸るとすぐ、二三人の友達といつしょに、お城山に植物採集に行きました。蒸されるやうな午後の日射でじっとりと汗ばんでゐたのも、だん〳〵薄暗い木立の中に入つて行くと、ひやりとした新鮮な空氣が溢れてゐて、今迄の暑さから急に甦つたやうな氣がしたし、しばらく採集してゐる中に、誰が言ふともなしに話が昔のお城のことに就てはずんできた。前に受持先生から、大田原城に就て色々お話を聞いてゐましたが、家へ歸つてから、もう一度おぢいさんにお話を聞くことにしました。

夕飯がすんだあとで、僕はおぢいさんに、

「大田原城は何時頃迄あつたのですか」

と言ふと、おぢいさんは

後奈良天皇（第百五代）
武藏の國（今の東京府のあたり）
廢城（城をとりのぞかれる）

「お城のお話かね。」

とおつしやつて、色々お話をして下さいました。

「後奈良天皇の天文十二年、今から凡そ四百年前、武藏の國の大俵康清といふ方が、金田村町島の地に來て、初めて水口城を築いたが、地勢が全つて平地のため、蛇尾川に洪水がある毎に武家屋敷が荒されたり、又諸方に勢力を示す上にも、敵から攻められ易いといふ上からも、大へん不便が多かつたので、資清公の時になつて水口城を前室村に移して、其の時から大俵を大田原と改め、大田原城として、ながらく此の地方の發展の中心となつてゐたのだが、明治維新になつて廢城となつたわけだ。」

「前室村といふのは、どこのことですか。」

「それは、昔大田原のことをいつた名だ。」

「お城は、大てい嶮しい所に築いたやうですが、どういふわけでせう。」

「昔は敵から攻入られても、塹濠や土壘が丈夫に出來てゐさへすれば、それで充分守ることが出來たのだ。大田原城も嶮しい崖の上に築き、天然の城廓といはれて、かなり要害の地とされてゐたやうだ。」

塹濠　ほり
土壘　とりで

おぢいさんはすぐ言葉をついで、

「今日のやうに科學が進歩して、空からでも攻められるやうになつては、城は全く必要が無くなる。世の中の進歩といふものは、實に驚くの外はない。水口城が大田原城へ移つたのも其の頃初めて我が國へ鐵砲が傳來したために、戰術や築城法に、大へん改めなければならない點が出來たゝめであらう。それにあの山の形が龍が伏してゐるやうだといふの

鐵砲傳來　紀元二二〇三年ポルトガル人、種子島に傳ふ

で、人々が龍體山とも呼んでゐる。」

「それは面白い見方ですね。それから大田原藩の領地は。」

昔は藩の大小は石高によつてきめられたもので、大田原藩などは、約二萬石ほどの外様大名だつたが、この城は「奥州口一の關」といはれて、德川幕府からなども、なか〳〵重要な場所とされてゐたものだ。天文十八年、豊臣秀吉が奥州を鎮めやうとして軍を進めた時に、此の城に宿營したこともあると傳へられてゐる。龍體山に高いお城の屋根が聳えて見えたのも、腰に大刀、小刀を差した武士が城下町を賑はしたのもわたしが幼い昔のことで、世うつり年變つて、今は昔の俤を知るものといつてなく、たゞ城址に聳え立つて、靜かに昔の夢を宿してゐる、僅かな大木があるだけだ。」

と暫らくお話を續けられてきたおぢいさんはこの時じつと

領地　内から貰れる米の石數
外様大名　諸代大名に對していふ
俤　やつす

して幼時を追懷してゐるやうであつた。本丸や武士屋敷跡のことは、來週の日曜日におぢいさんといつしよに行つて、實地に研究することに約束して下さいました。先祖樣が此の地の名主であつただけに、おぢいさんはくはしいことまで知つて居られて、大變有益でした。

名主（村や町たにおお役人い）

第三課　公園の櫻

こゝ二三日の上天氣にごこの櫻も一時にばつと咲いてしまひました。おとうさんが用事の都合で公園の前を通つたときかで、夕飯を食べながら

「公園の櫻も大分ほころびたな。もうすぐ滿開になる。」

とおつしやつたのは、たしか一昨日のことでした。

咲き出しては一日と言へないものです。家の二階へ上ると公園がよく見えます。澤山ある櫻の木が今盛りの花におほはれて明るく映え、山一帶が雲に包まれたやうです。その間に小屋掛けの茶店などが見え隱れしてゐます。今日もまた、そろ〳〵花見の人が出始めたらしく石段を上る影が見え、又幹面の芝生のあたりを駈け廻つてゐる子供の姿も見えます。

前の家では昨日お花見に行きました。今年五つになる三ちやんが今朝早くから風船を鳴らしたりおもちやの空氣銃の音をすぼん〳〵させたりしてゐました。

みち子がよい着物に着かへて上つて來ました。

「天氣がよかつたら、今度の日曜は家中でお花見だ。」

と、この間の晩おとうさんが上氣嫌で皆に約束したからです。花曇りといふのでせう、照りもしないが曇りでもありません。寒くなく暑くなく、ほんたうに春らしいのどかな日です。

十時の鳴るのを聞きながら家を出ました。出がけにお隣を誘

ひましたら、

「どうぞ一足お先に。」

とのことなので、ぶら〳〵行くことにしました。

公園の麓近くへ來るとだん〳〵人が込んで來ました。ごこから遠方から來たらしい人々が二十人程バスから降りてゐました。私たちは南の入口から入りました。この木を見ても滿開です。

「今年は天氣續きなので花の色が一入だ。」

と見物人が褒めてゐました。おかあさんも

「ほんとに見事ね。」

と、感心しきつた顔。

櫻の木の下や見晴しのよい所に何軒も茶店が出てゐます。おかあさんの背中で次郎がほしがつたものですから大きい花

見せんべいを買ひました。間もなく首に揃ひの手拭を卷いた一團の人々が人込の中を陽氣に騷ぎながらやつて來るのにあひました。その時汽笛が聞えて汽車が公園の下のトンネルに入りました。子供たちが崖の方へかけて行つて鐵橋の上に出た汽車を見送りながら

「萬歳。」

と叫びました。

招魂社と神社とに參拜して西側へ出ると、後から來たお隣の人たちと一しょになりました。こゝの芝生でお晝を食べながら、公園のお話やこゝの櫻のことなどをお隣のをちさんからくはしくうかゞひました。それからその邊を少し見て龍泉寺の前へ下りて歸りました。

夜になつて公園を見ましたら澤山の電燈がともつてまるで

不夜城のやうでした。

第四課　とげ魚

産地　吉祥寺、岐阜、秋田にも產する

とげうをは、すぐ隣村の親園の實取といふ處を流れてゐる川に、澤山住んでゐる。初夏の晴れた日に行くと、きれいにすんだ水の中に、ちつとしてゐるとげうをを見ることができる。ズボンをまくりあげて、水中に靜かに入つてみると、ひやりと冷たさを感ずる。多くの泉が近くにあつて、この川の水源をなしてゐるのである。

とげうをは、こんなきれいなそして冷たい水中にのみ住む魚である。用意して行つた網で水草の生ひ繁つた處を丁寧にすくつてみると、容易に捕へることができる。

バケツの中に入れると元氣よく泳いでゐる。

美しく彩られてゐるのが雄であつた。雌は產卵期であつたので腹が大分ふくれてゐたので、すぐ見分けがついた。

小さい鮒の樣な魚であるが、體の幅が割合にせまくて、脊鰭の前方に、數本の小棘と、腹鰭、臀鰭に各一棘とを有してゐる。とげうをの名はこゝから出たものであらう。

家へ持ち歸つて水槽の中に入れて毎日數回も水をとりかへてやつたが、四五日で死んでしまつた。中には家へくるまでに、びんの中で死んでしまつたものもあつた。

とげうをを飼育するのは、むづかしいことである。水槽の水が絶間なく新しいのと取りかへられるやうな設備でないと、長く飼育することはできない。

とげうをは、面白い習性をもつてゐるので有名なのである。それは泥中や水草に巢をつくることである。親園に住むとげうをは泥中にのみ巢をつくるやうである。

そしてその巣の中に雌が産卵し、雄が之を保護愛育するといふから感心してしまふ。雌が巣の中に入つて産卵する時は、雄は巣の入口の附近に、ぢつとして見張をしてゐるから、巣の所在はすぐ見當がつく。手で靜かにすくひあげると、泥の中に巣と卵を發見することができる。

一般の魚は自分の産んだ卵については一向無關心であるのに、とげうをのみこのやうな珍らしい習性をもつてゐるのである。

專門の學者や生物の研究に趣味をもつてゐる人達が、親園にとげうを研究に來ることを度々見受けることがある。

金田村市の澤の川にもとげうをが住んでゐる。この川の狀態は親園のと全く同一といふべきものである。

親園でも市の澤でもひやかしといつてゐるが本當の名前はとげうをといふのである。

私達はこの珍魚をよく保護してやらねばならない。

第五課　大田原町役場

大田原公園に上つて大田原町を瞰下すると、先づ大きな鐘樓が目につく。こゝが大田原町役場のある所である。

大田原町役場は明治二十四年、町村制實施に際し改稱せられたる役所で、現在二十二區に分れた大田原町を治める場所であるこゝには事務を掌るために町長・助役・收入役及び多數の吏員がゐて、教育・戸籍・土木・衛生・兵事・勸業・社寺・社會事業・租稅・賦課徴收等の仕事に携はつてゐる。何れも本町の繁榮を圖り、町民の福利を增進するための施設經營に外ならないのである。

大田原町の經營してゐる教育事業に、初等普通教育を行ふ小學校と青年を教育する青年學校とがある。尙本町では大田原

瞰下（みおろす）
鐘樓（つりがねとかたる樓）

適齢者　とし に達した者

幼兒園に補助金を交附したり、教育品展覽會・講演會等を開催するなどして、教育の普及發達には特に意を用ひてゐる。

戸籍については、戸籍簿・寄留簿等を備付けて住民の出生・死亡・婚姻・出入寄留等を明にし、土木事業としては、道路・橋梁の修繕・新道の開設などをして町民の便益を進めることに努力してゐる。こゝ二三年の間に、道路や橋梁が見違へる程立派になつたことに驚くであらう。

衞生方面の事業としては、衞生組合と聯絡して塵芥・汚物の掃除や、清潔法の實行や種痘・接種・腸チブスの豫防注射等を行ひ、尙隔離病舍の設けも出來てゐる。時には、衞生展覽會や、講演會・活動寫眞會等を催して衞生思想の普及を圖り、大田原公園なども特設して町民の健康增進につとめてゐる。

兵事方面としては、徵兵令の制度に從つて適齢者を調査した

行路病者　病になつてたほれた旅人

り、在鄕軍人分會と提携したりして鄕軍の團結を固くして、國家の一大義務を果すことに心掛けてゐる。

勸業については、農産物品評會・實業に關する講演會の開催・大田原町農會の補助等・種々の施設を設けて本町産業の改善振興をはからうとしてゐる。

社寺については、鄕社大田原神社・大田原町招魂社等に補助金を交附し、全町擧つて敬神崇祖の念を涵養することにつとめてゐる。

本町の經營する社會事業もまた少くない。公益質屋を設立して、金融を便利にし方面委員を囑託して、町民の生活狀態を調査し、大田原町社會事業助成會と提携して窮民の救濟・行路病者の救護等にあたるなどは其の主なるものである。

此の外消防組を組織して、火災・其の他の警備にあたり、青年團・

女子青年團・双葉圖書館等に補助金を交附して相互の連繫を圖るなど、本町の事業は、數へきれないほど多い。

本町の事業が、此のやうに多くなつて來たので、其の費用も、年一年と增加し、ただいまでは、豫算總額八万五千圓を越すやうになつた。この費用の大部分は、町稅として町民が負擔してゐるのである。

町民がよく理解して、納稅の一大義務を果すことに心掛け、納付限期を實行さへすれば、手數も省け、町は益々圓滿に發展するのであるが、滯納者が一人でもあるとそれたけ町の仕事が鈍くなり、發展が害されるわけである。

滯納者（をさめとさどこほるもの）

私達はこの國家の一大義務を、必ず果すことに心掛け、益々協力一致して大田原町の繁榮に盡力すべきである。

第六課　遠足

今日は僕達の遠足の日である。午前八時、學校の門を出て寺町から大久保新道を通り、蛇尾橋を渡るとも う其處は金田村である。温泉坂を上りながら振り返ると、城址の森がこんもり茂つて見える。自動車が埃をあげて通るたびに、先生は危い、危いと云つて注意をされる。道の兩側は大抵麥畑で、何處かで鶯が鳴いてゐた。

避病院の坂を上ると、直ぐ其處が金丸原である。ひろ〳〵とした草原が眼の前にひらけて、陽炎が立のぼつてゐる。僕達は原の中程で休むことになつた。草の上に腰を下したり、寢ころんだりして、休んだ。草に交つて、眞赤な木瓜の花がたくさん咲いてゐた。

「さあ、出かけよう。あの山の頂上に上るのです。」と先生がおつしやつた。僕達は廠舍の後の山に上つた。涼しい風が、汗ばんだ頰

をなでゝ吹いてゆく。眼の下には廣い草原がひらけて、その向ふに金丸の小學校が小さく見える。家や森の間に所々白く光つて見えるのは黑羽街道である。

遙か北の方には、那須の火の山が美しい裾を引いて聳えてゐる。

「あ、煙が煙が」と誰かゞいつた。見るとかすかではあるが其の頂から白い煙がひとすぢ立昇つてゐる。東の方には八溝の連山がうね〳〵と續いてゐる。男體山も遠く霞の中にぼんやりその圓い姿を見せてゐた。僕達は此處でお辨當を食べた。先生はスケッチ帖を出して一心に繪をお描きになつてゐる。

突然ラッパの音が直ぐ近くの山で起つた。兵隊さんが來てゐるのだと僕は思つた。此處は陸軍の演習地になつてゐるので、いつでも兵隊さんの來てゐないことはない。近頃は歩兵や砲兵のほか戰車隊や飛行隊なども屢々來る。飛行機が銀翼を輝かせながら青空高く演ずる曲技は思ふだけでも實に壯快である。

「これから廠舍の見學をして歸りませう。」と先生がおつしつた。僕達は元氣を出して山を下りた。

學校に着いたのは午後二時頃であつた。

第七課　那須與一

滴るやうな綠の那須野を旅する者は、白い菅笠や、ほゝかぶりをした若い男女たちが、

「那須與一は三國一の男美男で旗がしら」

と、節面白く田植のうたをうたふを聞くであらう。

思ひ起すと、元暦（げんりやく）二年、春も半の二月十九日、太陽は屋島の彼方

元暦　安德天皇の御代の年號

玉蟲の前　舞の前ともいひ建禮門院に仕へた女官

滋籐の弓　下地を黒塗にしてその上にに藤をよく巻いた弓

氏の御神　那須溫泉神社

瀨戸内海に沈まうとする夕方沖には平家の軍船列をなし、陸には源氏の大將義經以下、くつわをならべてゐる。

生年十七才の與一宗隆は義經の命により雜司玉蟲の前が、「射よ」と招く扇を射んがため鎧冑に身をかため滋籐の弓に赤銅造の太刀を佩き、鵜黑の馬にまたがり手綱をとつて、悠々と扇の方へ打向つて行つた鎧の袖が水の届く邊まで進むと、馬は打よせる波に驚き少しもちつとしてゐない。玉蟲が招く扇を見ればこれも亦西風に吹かれてくる〳〵と廻り少しも定まらない此の時宗隆は靜かに目をつぶり心を鎭め。

「歸命頂禮八幡大菩薩、日本國中大小神祇、別しては下野國日光宇都宮、氏の御神那須大明神弓矢の冥加有るべくは扇を座席に定め給へ、源氏の運も極り、家の果報も盡べくは、矢を放ぬ前に深く海中に沈め給へ」

箙　弓矢をへれておくもの

と心の中に祈念して目を開けば風は少し收まり扇の座は靜まつた與一は鏑矢をぬき取り滋籐の弓にひきつがひ、一心こめてひやうと引放した弓は強く鏑矢の音は浦ひびくほどに長鳴りしてあやまたず扇の要一寸ばかりおいてふつと射切つた扇はひら〳〵と空に舞ひ、折からの夕日にきらめきながら波間に落ちた平家は舷を源氏は鞍前輪や箙をたゝきながらあ射たり〳〵。」と感心し暫く鳴采の聲は止まなかつた。

玉蟲の前は白波にゆられ漂ふ紅の扇の面白さに

「時ならぬ花や紅葉を見つるかな
　芳野初瀨のふもとならねど」

と詠じたのであつた間もなく平家の侍伊賀十郎兵衛尉家員といふ者黑糸縅の鎧に冑はつけず、白柄の長刀持つて、殘された要の下に舞を初めた源氏勢の三郎義盛、與一の後に行き「判

官殿の御命令だ。あれも射よ。」と家員を指した。與一再び狙ひ定めて矢を放つた。狙ひもとより誤らず眞逆に海中に落込んだ。二度の功名に又もや喝采の聲はわき上つた。

かくして弓矢の武名を四海に輝かした宗隆はその軍功の賞として那須總領に命ぜられた。上五ケ所の莊園を賜つたのである。

第八課　松並木

藥師堂から縣道を約三四百メートル南に足を運ぶと松の並木に入る。街道の兩側にすく〳〵と何のわだかまりもなく伸びた六百餘本の松は、往來の人々に何時もすが〳〵しい氣持を與へてゐる樹下を流れる二筋の小川のせゝらぎは、この松並木に一段の風致を添へてゐる。

昔から名高い六本松も此の並木の中にある。

參觀交代の行はれてゐた當時、奥州の大名は此の街道を往き來したのだ。繪で見るやうに悠々と長い〳〵大名行列、裃に草鞋がけ、大小二本をたばさんだ士が偉風邊りを拂ひながら、此の並木の一本道を濶歩した當時の情景はどんなであつたらう。

枝にも葉にもしつとりと、露を受けた松の並木の景色、人工を施さぬ大自然の崇高なる姿が朝霧の中に見る事が出來る。しと〳〵と降り注ぐ五月雨の松の並木の情趣は又格別である。

褐色の幹、目覺めるやうな新綠の葉、此の二つが程良い調和を保つて一際美しさを增す。

燒きつくやうな眞夏の晝下り、驟雨俄かに來つた後の並木は、まさに涼味萬斛。綠色一入鮮かな景色は此の並木ならでは到底味ふ事の出來ぬ眺めである。

山々の木の葉木の實の色どり〴〵に染めなされる頃、黄ばんだ松葉の音もなく散るさまはいひ知れぬ寂しさをそゝる。殊に晩秋の夕暮れ時、葉蔭に鳴く蟲の音の物寂しさは何こいつたらよからうか。

何時見てもあかぬ眺めの松の並木ではあるが眞冬は又いふにいはれぬ力强さを起させる。草や木の葉が皆枯れ果てゝ嚴寒肌に浸み入るやうな那須颪の吹き荒ぶ時にも、白雪紛々としく枝もたわゝに降り注ぐ時にも、己が操をかへぬ純潔な樹姿、人の心もかくこそと思はれる。

那須野原の處々に松の並木はあるけれど、數からしても、樹齢からいつても樹姿から見ても、此の松並木に勝る並木はない。六本松の松並木こそ那須野原唯一の名並木である。

第九課　方言の話

大昔人が此の地球の上に生活し始めた頃は言葉と言ふものがありませんでした。

十人十色と言ふことがありますが十人集れば十人皆其の顔の形が違ふ樣に、考も又皆異つてゐます。

人が社會生活をするには、どうしても自分の考を相手に知らせると言ふ事が必要になつて來ます。

では其の頃はどうして、自分の考を相手に知らせたでせうか。

それには色々な方法があつたでせう。

しかし其の一つとしては、手眞似や身振で其の考を相手に知らせたのです。

しかし文化は日に〴〵進んで行くので、此の樣な方法では色々な方面から不自由を感じ、滿足することが出來なくなりました。

其處で色々考へた結果、呼吸を利用して發する音の高低による符號を考へ、此處に初めて不完全ではあるが、言葉が生れて來た譯で、それが次第に發達して、今日の樣な完全に近い言葉が出來上つたのです。

これを永く保存し、後世に傳へる爲に文字が出來たのです。

此のやうに發達して來た言葉も、廣い土地に於ては皆一樣の言葉を使用すると言ふ譯には行きません。

例へば地勢・氣候・風俗・習慣等によつて、言葉が地方色を帶びて來て、日本語でありながら日本人全體に通じない言葉が生じて來るやうになりました。これを方言と言ひます。

又山間僻地の人の間にのみ使用される山言葉と言ふものがあります。

これは狩又は其の他の仕事で山に入つた時にのみ使用され、

里に下つては決して使はぬと言ふ特殊な言葉であります。

方言は一地方の人の間にのみ使用される言葉であつて、例へば關西地方の人に使はれてゐる「あかへん」「あかん」は正しい言葉で言ふと「いけません」「そをやす」はさうです「ほんま」には「ほんたうに」。又東北地方人の間に使用されてゐる「ぬくい」「ぬくこい」は「暑い」。「ぶくつて行く」は「追つて行く」でありますが此のやうな言葉は皆さんにはわからないでせう此のやうに大田原地方にも方言が使用されてゐます。

あきれたと言ふ言葉は正しくは飽きたであり、「あそんべ」は「遊びませう」。「いかないけ」は「行きませんか」。「いつてつべや」は「云つてゐますよ」。「かんべんしろや」は「ごめんなさい」。「しんねは知りません」。此のやうに數へ擧げれば隨分多くの方言を使用してゐることに氣がつくでせう。

皆さんが關西や東北地方の方言がわからないと同じ様に皆さんの間に使用されてゐる方言は關西や東北地方の人にもわからないのです。

其處で言語の統一、卽ち標準語が必要になつて來たのです。國定教科書に載つてゐる言葉がそれで、日本中通ずる言葉です。しかし此の標準語も時代と共に多少の變化は免れないものです。

これは東京人の言葉を標準としてゐるので、文明の進歩につれて、次第に文化生活に卽した言葉が生れて來るのであります。

標準語は優雅高尙で而も明瞭であります。これに反して方言は粗野下品で且不明瞭であります。

故に標準語を使用して生活することは文化生活であり、方言生活は野蕃生活であるとも言ふ事が出來ませう。

第十課　大田原町

那須與一で有名な那須野ヶ原の中央蛇尾川の右岸に位する町が我が大田原町である。宇都宮市は南より少し西にあたり鐵道によれば四十八粁、一時間餘で達する。東京市もほぼ同じ方角で百五十粁汽車で約三時間で行ける。

東西四粁、南北五粁で、面積約十一平方粁ある。東北部は金田村に續き、西北部は狩野村に接し、西部は西那須野町と境してゐ、南は親園村である。

人口は約一萬一千人、戸數約二千三百戸であつて郡內第一縣で第九位の町である。

明治維新までは大田原城下で、大田原藩の中心であつた。明治二十二年自治制を施行してから大田原町と稱した。明治十一

大田原町の舊名
南野荘福原郷―大田原村―大田原宿（現大田原町）
大田原町より
東方―九粁黑羽町
西方四粁西那須野町
南方八粁仏久山町
北方十五粁里磯町
昭和五年十月現在宇都宮市
足利市　八一、三八八
栃木町　四九、八九八
足尾町　二三、六八四
鹿沼町　二一、八〇三
日光市　二九、九六九
佐野町　一七、一七九
小山町　二三、九三七
田沼町　二二、八六二
今市町　二二、六六七
大田原町　一〇、九四〇

舊藩主は現子爵大田原氏

元郡役所内には財務課、土木課、農務課、林務課の出張所と郡農會がある

年那須郡役所が設立されてこゝに那須郡政治の中心地となつた。從つて警察署・區裁判所・稅務署・營林署・宇都宮專賣局出張所等が設置されてゐる。其の後郡制は廢止されて郡役所は無くなつたが元役所内には縣廳の四課の出張所が置かれてゐて行政の中心であることには大きな變りはない。東の方近くに金丸原陸軍用地があつて、演習のため各種の兵馬が往來すること多く近年は各飛行學校・飛行隊がかはる〳〵來て練習を盛にやつてゐる。時折は戰車隊・自動車隊・氣球隊・鳩班等が來る。

戸數二千三百戸の中約七百戸は商業に從事し六百餘戸は農業を營んでゐる。荒町・上町・仲町等は人の往來最も多く、商業も活氣を呈してゐる。寺町には食品市場があつて、毎朝澤山の魚菜が取引されてゐる。荒町にある那須商業銀行は當町唯一の

各産物の年額は昭和八年度の統計

米	
昭六—	七二一斗
昭七—	一、三四八斗
昭八—	一、〇五四斗
繭	
昭六—	二、六八一〇千
昭七—	二七、八三三斗
昭八—	三三、八二一斗
年生産額	
昭六—	五〇九、八三三圓
昭七—	六三六、三八八圓
昭八—	一、〇四一、〇二五圓
自動車	
乘用車	一四臺
荷物車	八臺

銀行である。

農産物は年産額三十一萬圓、其の中主なる物は米千九十四斗・大麥四百五十斗・小麥五百十斗・繭三十四噸等である。蓄産物は三萬圓・林産物は五萬圓である。工産物は六十八萬圓・町の各所に煙突の見えるのは酒・醬油の醸造所である。此處で製造される酒は十七萬圓・醬油は十五萬圓である。木製品の五萬圓等が主要なるものである。年産額は百七萬圓で、一戸當り四百七十一圓で一人平均九十二圓である。

塩那電氣會社は其の名稱の通り那須郡・塩谷郡の各河川を利用して發電し、之を兩郡に配電して照明に動力にラヂオに其の需要を充してゐる。東野鐵道は西那須野に發して大田原を經て小川を終点としてゐる。本町を中心とする乘合自動車は四圍の町に通じてゐる。大田原東京間には毎日一往復トラッ

クの便がある仲町には郵便局があつて、郵便物は勿論電信電話が各地に通じてゐる。町内二百餘の電話はこの局内の交換所で交換されてゐる。

縣立中學校・高等女學校が有り、其の他私立女學校が二校もある。郡内行政の中心であると共に教育の中心でもある。

上の山には鄉社大田原神社があつて其の前の方は公園になつてゐる。山が南に延びて終らうとする所こゝが大田原城址である西那須街道が町に入る所に偏照院成田山がある。祭日には參詣人が雲集する。

電話　二一〇

龍泉寺―眞言宗
正法寺―日連宗
成田山―眞言宗
忍精寺―眞　宗
不退寺―時　宗
洞泉院―曹洞宗
光眞寺―曹洞宗

第十一課　時の鐘

私達が明けても暮れても毎日聞くあの親しい役場裏手の「時の鐘」は私達が校庭や町の道路からなど眺めますとあの高い鐘樓の上に、ぽつつと黑い物が吊られてあるやうに見えます

が近づいてよく觀ると、それは實に大きな釣鐘で如何な大人でも易々と上半身を入れることが出來る程です。此の鐘は古い由來があるのです。先づ大田原公が命じて現在の場所に草屋根の樓を建てさせ時刻を報ずる番人を置き明け暮れの六つ時に時刻の數だけ撞かせて町民に知らせたもので、之を「時の鐘」と言ふことになつたものです。

其の當時を追想してみればたしかに時刻を知る唯一の有難い賴り鐘であつたでありませう。

戊辰戰役の際町民は殆ど四方八方に難を逃れて民家は大火災のため大方燒き盡くされて一面燒野となつてしまつたのです。

此の時上町の津久井氏が歸町して町は大半燒け人影一つ見えない有樣を見て淋しく情けなく憤然として落つる涙も拭

ふ暇なく、焼跡に轉げ出された時の鐘を焼柱に引きトげ「町民よ集れ、もう戰亂は止んだのだ。我等の郷土を一日も早く復興せねばなるまい。町民よ吃のなつかしい鐘の音を聞いたら安心して集れ」。とばかり滿身の力を込めてしきりにゴガン〳〵〳〵と打ち鳴らしました。近村に避難してゐた町民はこの聞き馴れた懐しい鐘の音にほつと安心して、あの時の鐘が鳴り響く上は、きつと會津兵は逃げ去つたのであらう。とそろ〳〵荷物をまとめ町に歸つて來て仕事に取り掛つたと云ふことです。

古い鐘樓は此の際焼けてしまつて今はその面影は見られませんが今の高い鐘樓は役場の新築と同時に建築されたものです。

かう考へて見ると、あの時の鐘は大田原町にとつては實に意

味の深いものであることが解ります。

私達は此の歴史ある時の鐘の音を朝に夕に聞きながら、大田原町に生活してゐるのです。

あの鐘の音の中には「醒めよ町民よ、我が報ずる時刻を基準として正しき時間を守り、生活を正せ。うんと勉強しうんと働き町の發展を計れ」との響きがあるやうでなりません。

時の鐘が鳴り渡つたとき「あ二時だ。四時だ。もう六時になつてしまつた。八時になつてしまつた。」と時間に追はれて生活する人でなく、此の仕事は二時までには必ず仕上げ。あの集會は四時だから必ずそれまでに集る。と自ら時間を活用し支配する人になりたいものです。

第十二課　大田原停車場

大田原停車場は町の東北寺町にあつて、東北本線西那須野驛

大田原驛よりの距離

小學校　〇・九粁
女學校　一・二粁
中學校　一・二粁
成田山　一・〇粁
藥師堂　一・三粁

大田原を中心とする自動車網
西那須野方面
矢板方面
金田黑羽方面
湯津上方面
親園佐久山方面

を起點とする東野線の要驛である。東野線は大田原驛より更に東に進み、金田村を横斷し川西町を經て南に向ひ湯津上村を過ぎて那珂村小川に達してゐる。大田原驛から西那須野驛までは九分、黑羽驛までは十七分、終點である那須小川驛までは四十分を要し、那須郡中部を連絡する重要交通機關となつてゐる。

馭者　馬車の前に乘つて馬を扱ふ人

東野鐵道は今より十八年前の四月に開通したのである。鐵道が開通する以前、この地方の交通機關としては乘合馬車、人車鐵道等であつて、乘合馬車は馭者がラツパを吹いて乘客を集め、西那須野黑羽間を走り、人車鐵道は西那須野大田原間に敷かれて旅客に便を與へてゐた。今でも當時の人車軌道が殘されてあつて、榮町附近の道路でレールや枕木を見ることが出來る。貨物の運送は大てい馬車に限られてゐて、毎日二三十臺

運搬　はこびおくること

の馬車が列をつくつて、黑羽から大田原へ、大田原から西那須野へと運搬をしてゐたそれが東野鐵道の開通によつて、東北本線西那須野驛に連絡する重要な交通機關となり、當地方交通運輸上に大なる利便を與へるやうになつた。

大田原町はこれが爲に驛前の道路は廣められ、荒町通へ通ずる道路も出來て、町は目立つて立派になり、活氣をみせて來た。驛前は乘降客によつて賑ひ、貨物置場には、貨物が山と積まれるやうになつた。近年は發着の貨物も增加し、客車貨物車の發着もしげく、乘降客の數は一年間におよそ十一萬人に及んでゐる。

横濱　神奈川縣廳所在地、貿易港

大田原驛で取扱はれる貨物は、其の數が多く種類もまた少くない。發送貨物は主に隣り村である親園村・金田村より積み出される農產物であつて、米・葉煙草・小麥が大部分を占めてゐる。

小山　下都賀郡小山町
大田原宇都宮間　四六、八粁
大田原上野間　一五二、七粁
大田原青森間　五九二、九粁
青森　青森縣廳所在地にして北海道と連絡す

米は野州米として東京横濱方面に送られる。小麥は宇都宮小山方面に送られ、大部分製粉の原料となつてゐる。なほ大麥・漬物等も發送貨物の重要なものであつて、漬物は遠く北海道や樺太にまで送られるとのことである。到着貨物の主なるものは農家で使用される諸種の肥料が大部を占め、驛から各地の肥料商へ運ばれる。其の他セメント・石炭・大豆・織物・煙草・ビール・揮發油等も到着貨物の重要なものである。

大田原驛から宇都宮までは、およそ一時間二十分にして達することが出來、東京上野驛へは三時間半、本州の北端青森へも僅か十五時間餘にして到着することが出來る。

第十三課　不退寺

下町から南へ通ずる新道には、大田原町で最も古い寺院である不退寺がある。道路に沿つた約百二十メートルの間には、美

扁額　門や戸に掲げる額
山門　寺の門
庫裏　寺院の居室の豪所や
天文年間　御奈良天皇の御代
水口　今の金田村大字町島
千手觀音　千手千眼の觀音

しく造られた石塀が目立つて見える。

前室道場と筆太に書かれた扁額を仰ぎながら、山門をくゞる。掃き清められた庭には、木の葉一枚落ちてゐない。そしていゝあんばいに濕つてゐて、あたりは靜かであつたお坊さんをお訪ねしたら喜んで迎へてくれた。其して庫裏の一室へ通されたそこで色々とお話をして下さつた

大田原町は昔前室村といつて、人家僅に十六軒那須野ケ原の一小村落に過ぎなかつた。天文年間大田原備前守丹治資清が、城を水口より前室村に移したのであつた。當時城の四方固の一として東にあつた千手觀音の像は今此の寺に安置されてゐる。

其の後此の村に奥野久三郎近重といふ者があつて、非常に武藝戰術を好んで、多くの人々を殺傷する事を何とも思はなか

提菩　佛道のさとり
弘安三年　御宇多天皇の御代
巡錫　錫は僧のつく杖　僧が諸方をめぐること
受戒　始めて佛門に入るものの戒をうくること
正應年間　伏見天皇の御代
遊行　一遍上人の別名
開墓　寺をひらいた人

つた。近重は或る時深く我が身に考へる所があつた。卽ち過去の非行を悔い。是等の人々の菩提を弔はんと日夜念佛に餘念がなかつた。たま〳〵弘安三年、時宗の祖師一遍上人が奥羽地方へ御巡錫なさる途中此の前室村に御留錫になられた。近重は是を機として、自分の心中を上人に話し剃髪受戒して全海と名のり、一つの庵を造つたのであつた。是を前室庵と稱へた。近重は此の庵で朝夕讀經念佛怠りなかつたので、附近から近重について稱名念佛をする者が多數集つて來た。即ち念佛の道場であると云ふ意から、前室道場の名が起つたのである。

正應五年遊行二祖他阿眞教上人が、此の前室庵に御留錫になつた際、前室庵を改めて蓮臺山九品院不退寺と稱へる樣になつた。此の上人が當山の開基で、今の大手通にあつた。

享保二十一年二月本堂も庫裏も其の他一切火災にあつて燒

文久二年　孝明天皇御代
桝組　柱などの上に設けた方形や矩形の木
文政五年　仁孝天皇の御代
梨本宮　守正王殿下

けてしまつた。其の年四月に現在の地に再建したが、後何回か燒けたり建てたりしたので、寺の寶物として今殘つてゐる物は殆どない。文久二年に庫裏を建て、大正元年に本堂を建立したのが現在のものである。

本堂は間口九メートル奥行十七メートル、見事な桝組やいろ〳〵の彫刻には丹青の色彩が施されて一層の美觀を呈してゐる。中へはいると正面には「九品院」と金文字も鮮かに書かれた額が殊に目につく。

本堂に向つて左側に細長い池がある。池を隔てゝ小高い所に小さなお宮がある。お坊さんは、是は西國三十三番所觀世音菩薩を象つて祀つたもので文政五年に出來たのだ」と言つてゐた。更に進むと、梨本宮殿下のお手植の松が簡素ながらしつかりした竹のかこひの中に、綠も鮮かに見える。境内には其の他

いてふ・松・檜等が手入もよくうまい配置に植ゑられて實に氣持がよい。時宗遊行派不退寺はこのやうに大田原町の起りと密接な關係があり古い寺なのである。

お坊さんは其の他色々のお話をして下さつたり、見せて下さつたりした。

第十四課　昆　虫

「にいさん早く、早く來てご覽なさい。座敷で讀書して居た兄は、弟の突然の叫び聲に驚いて飛んで來た。見ると三郎は縁側に腹這ひになつて縁下を覗き込んで居る。

「何んだ、〳〵。三郎。」

「にいさん此の蟻と喧嘩して居る虫、は何んですか。」

「どれ、あゝ此れか、お前よく見つけたね、此れが蟻地獄だ。」

「えつ、蟻地獄恐ろしいやうで面白い名前だなあ。道理で地獄に

落ちたやうに蟻が苦しんで居る。

「此の虫は面白い虫でね、決して前へ進まないんだ。後へ〳〵と退くんだ。その尾の先で砂を掻きながら輪を描いて歩く中に、こんな擂鉢のやうな形をした穴が出來てしまふんだ。そこへ蟻がやつて來て落ちようものなら最後、いくらはひ上らうとしてもずる〳〵滑つて決して上れないんだ。その中に蟻の疲れた頃、大きなはさみで蟻のおしりを切つて血を吸つてしまふんだ。」うまく考へてゐますね。そして蟻地獄はどの位の大きさになるんですか。いや蟻地獄は一生蟻地獄ぢやないんだよ。翅の生えた蜻蛉のやうな虫で、うすばかげらうと言ふ虫を知つてゐるだらう。あの虫の幼虫なのだ。」

「えつ、こんな小いさな、きたない蟲が、あのきれいな虫に。」

「さうだ。」理科で習つたことゝ思ふが、幼虫から成虫になること

を何と言つたかね。」

「知つてゐます。變態と言ふんでせう。」

「その通りだ。蜻蛉の幼虫は」

「水の中に住むやご。」

「甲蟲の幼蟲は」「知りません。」

「地蟲だ。農家の堆肥の中などにゐる大きな蟲だ。昆蟲の中には幼蟲の時代が大さう長くて十七年間も土の中に住んでゐる米國の十七年蟬などもある。」

「十七年間も土の中に。驚いたなあ、やつ、にいさん蟻地獄がゐなくなつてしまつた。」

「砂を少し掘つてごらん。そら居たらう、身を護る爲めに隱れて居るんだ。昆蟲は大概身を護る爲めに自然にうまく出來て居るんだが知つてるかね。まづ保護色警戒色それから擬態と言

擬態　動物の體形體

つて自分の居る圍りの物にそつくりな姿をして居るのがある。それで有名なのは、木の葉蝶、どびんわりだ。普通尺取蟲と言つてるね。」「面白い名前ですね。僕、讀方で習つたのですが本當なのでせうか。」

「本當だとも、お前も割らないやうに注意するんだね。かうした昆蟲の身の護り方を近頃では人間が盛に眞似てゐるね。知つてゐるかね。」

「兵隊さんの、カモフラージュ。」

「さうだ。滿洲事變などで盛にやつたね。タンク、汽車、飛行機までにも應用したね。昆蟲には其の他、蟻・蜜蜂のやうに一匹の女王を中心にして、子を育てるもの、外へ出て餌を集めて來るもの、敵を防ぐものなど立派に規則正しい社會を造つてゐる蟲もある。昆虫のそんな生活を面白くお話のやうに書いた本があ

色が他物に似てゐるために敵の眼よりのがれられること

カモフラージュ　相手の眼をごまかすこと

るから一度は讀んで置きなさい。ファーブルと言ふ人の書いた『昆蟲記』と言ふ本がそれだ。」

「にいさん此の昆虫の種類は世界にどの位ゐるものでせうか。」

「さうね、學者の研究によると約三十萬種もあると言ふことだ。お前の身體にもきつと昆蟲が一匹か二匹居るはずだ。」

「えつ、僕の身體に。」

「そんな嫌な顔をしなくてもいゝよ。蚤だよ。蚤だ。その三十萬種の昆虫が春から秋にかけて此の地球上にせつせと働いて居るのかと思ふと驚くだらう。三十萬種の外にも、まだ〳〵發見されない種類が澤山あることだらう。それだけお前等の研究することが廣いわけだ。殊に吾が那須野原は日本でも有名な昆蟲棲息地だから研究するには大變に都合が良いと思ふ

棲息　生存すること

第十五課　大田原郵便局

「郵便局は何をするところですか。」

「郵便局は遞信省の監督下に屬し、法律に依つて、國民の通信を掌つてゐるところです。尙郵便のほかに貯金・電信・電話・保險・年金等の事務も取扱つてゐます。大田原郵便局の郵便取扱區域は、當町と金田村の一部です。局に行きますと、入口の正面の右端より順々に次の樣な標札を見るでせう。年金・恩給拂渡、爲替・振替受拂、貯金受拂、保險・郵便年金受付、郵便切手・收入印紙賣捌・書留・小包引受、電信電話受付、この標札のある中で、事務員の人々が一生懸命に働いてゐるのです。その務は非常に忙しく、その骨折は並大抵でありません。」

「郵便物にはどんな種類がありますか。」

「郵便物には通常郵便物と小包郵便物との二種類があります。前者は、送附する物品の種類に依つて五種に分たれ、それ〴〵

附箋（つけがみ）
封緘（ふうじる）

重量の標準と、これに對する料金とを異にするものです。後者は小量の物品を包裝（ほうそう）して郵送するもので重量に依つて料金を定めるものです。

それから通常郵便物に於ては、郵便料金の未納又は不足の場合には二倍の料金を徴收されます。又誤つて他人への郵便物を受取つたときは、速にその事由、居所、氏名を附箋（ふせん）して郵便局に送り返し、誤つて開封した場合には、封緘（ふうかん）して右の手續をするのです。小包郵便物に於ては、普通の書狀を合裝すると罰せられます。以上のことはよく注意しなければなりません。

「金錢を送附するにはどうするのですか」

「郵便爲替と振替貯金との二法があります。郵便爲替には、普通爲替と電信爲替とがあります。郵便爲替には、送金額に制限があつて、小爲替は二十圓まで、普通爲替では三百圓まで、電信爲

年金（約定の期間中一ヶ年、六ヶ月、三ヶ月、一ヶ月等一定の期間を距てなす連續した定額の支拂金）

替は五百圓までに限られてゐます。振替貯金は郵便局に基金を預け置き、加入者より拂出書を以て先方に自分の預金より送金することを依賴し、又は現金を拂込んで加入者の口座（くちざ）に拂込むことを依賴する制度で極めて便利なものです。

「保險、郵便年金とはどんなものですか。」

「郵便局で取扱ふ保險は、國家で營む保險にして、之を官營保險と云ふのです。簡易生命保險はその一種です。郵便年金とは、政府が契約（けいやく）者又は第三者の生存に關して、その者に年金を支拂ふことを約し、契約者が代償（だいしょう）として、政府に掛金を拂込むことを約束するものです。」

「電信、電話はどんな仕組になつてゐますか。」

「事務室右端の室に、カチカチといふ金屬性の音や『もし〳〵』といふ人聲がしてゐます。此處が電信電話室です。電報は電信受

付の係から送られてきた電報類信紙の電文が送信機によつて送られ、又遠方からの電信は受信機によつて受ける仕組になつてゐます。その隣の交換臺では白い事務服すがたの交換手がレシーバー（受話器）を兩耳にあて『何番』といふ聲とともに、コード（連結線）をいそがしく交換機にぬいてはさし、さしてはぬいてゐます。ここで町内は勿論宇都宮・東京のやうな市外とも電話を交換することができる仕組になつてゐます。

今でこそこのやうに完備した大田原郵便局もその沿革を云ひますと、郵便事務の開始されたのは明治五年、電信は同二十二年、電話の架設は同四十一年であつたのです。尚明治二十二年三等郵便電信局に指定され、其の後町の發展と共にこれ等の事業も亦益々擴張され今日に及んだのです。」

第十六課　戊辰の役と大田原

慶應三年五月二日、三斗小屋に集まつてゐた會津藩兵三千餘人は高林を經て大田原に攻め寄せた。

巡邏兵（見まはりの兵）

是より先、我が藩は四境に巡邏兵（見張の兵）を派遣し或は士卒を督勵して近隣の警戒を續けてゐたのであるが何分にも手薄であつた。

先づ斥候を出して直に兵を進めた時には、六百の賊兵は既に沼袋及び石林の兩道より押し寄せて來た。

紫塚（紫塚にあり）の經塚の紫塚に陣を敷くと賊は直に發砲し是に於いて戰端は開かれた。

數時間に亘つて激戰が續けられたのであるが賊の援兵は益々加はりやむを得ず梨畠（荒町の商民福村久八氏の抱地）に引揚げた。

我が藩は百人そこ〳〵の少數で十倍に餘る敵の精兵と戰つてよく防いだのであるが、賊は巧に出沒して市内に潛入し民

家に火を放つた。

町民は命からゞ〳〵四方に逃げ散つた。

そしてこの頃には、賊の散兵は東は寺町口より西は下町口まで敷かれてちりぢり迫つて來た、退くことも進むことも出來ない血みどろの市街戰が長時間に亘つて續けられたが我が兵は支へきれず大手口まで押しつめられた。戰は益々不利に陷つて大手口も陷り、傷ついた將卒は城内に立籠つて背水の陣をとるより外に何うすることも出來なかつた。

賊は民家を燒き拂ひ餘勢を驅つて一擧にして城を屠らんとして城の門近くまで肉迫して來た。

賊は百戰錬磨の精鋭で窮鼠にも等しい捨身の戰法であつた。のみならず三斗小屋から高林を經て來襲の道すがら狩獵を生業とする土民を召集して來た爲め銃戰には極めて巧であ

窮鼠　迫つめられた鼠

つたために城内には彈丸は雨霰の如く降りそゝぎ天險を誇る城もあやふく、忠烈な藩兵も苦戰に陷らざるを得なかつた。併し城内の藩兵は必死の覺悟で應戰した。中には奮ひ立つて、旗をふるひながら指麾してゐる敵の隊長を殪すものさへあつた。續いて賊兵數十人を射殺するなど、我が藩の頑強なる抵抗にあひ多大の損傷を受けて、賊は士氣粗喪するに至つた。

たまゝ隊長阿久津正右衛門等來り尋いで援兵も加はり。戰ひ、我が藩の勢は大いに振ひ立つた。

この機に乘じて權現筒を連發したので賊の死傷はおびたゞしく、壁易して進むことが出來なくなつた。

怖ぢ氣ついた賊は喇叭を鳴らして兵を收め黃昏に紛れて退却せんとした。時に華陽門内にある作事場に火を放つたので轟然たる大音響をたてゝ爆發した。浮き足立つた賊は愈々周

權現筒　德川家康が會津の上杉景勝を伐つに當り我が藩祖主に賜つた鐵砲である

作事場　この作事場には大總督府より附せられ小下たり銃彈藥を約五万發を入れおいた之を爆

章狼狽し算を亂して敗走したのであつた。

發させて地雷火をしたのであらう

第十七課　城址に立ちて

根古屋川原へ水泳ぎに行つた歸りがけ弟と二人で城址へ行つた。

昔清水御殿のあつた前を通つてお城山の南の一角に立つと、大田原町の大部が一望の中に收められる。

遠く白雲を頂いた鷄頂(けいちやうさん)・男體(なんたい)の諸峯がその秀麗な姿を西の空に横へ那須野平原を抱くかのやうに見える。町の雜音も此處までは聞えて來ない。靜かな町だ。工業街でないこの町は煙突の數が少い。關東釀造の煙突が朦々(もうもう)と黑煙を吐き出した。弟もそれを見つけたとみえて、

「兄さん、大田原町で一番高いのはあの煙突でせう。」

と指さした。

「その次はあれですね。」

言はれてみると警察署の火の見櫓が白く光つてゐる。その前を寺町通が南北に通じ北端は大田原驛に及んでゐる。火力發電所の赤い建物が驛の東側に見える。あれから沼の袋・揚土方面にかけて森が多い。

「兄さんあれが今度建つた新校舍。僕たちの教室は見えないなあ。」「どれ、や全く立派だね。新校舍のずつと下に黑く高い屋根だけ見えてゐるのが兄さんたちの入つてゐる一校舍だ。成程三校舍は見えないね。」

「やあ、すると學校はずゐぶん廣いんだな。」

弟は學校の廣いのに今更のやうに驚いてゐる。僕たちの學校は校地といひ校舍といひ實に壯大だ。

學校の近邊はこゝにお城が聳えてゐた頃の武士の屋敷であ

闊歩（いばつておほまたに歩くこと）

つたさうだ。學校前の大手通なども大刀を帶びた武士が盛に濶歩したに違ひない。

折から役場の鐘が鳴つた。鐘樓に人の動くのが見える後には西洋造の役場がある。あのあたりから西北にかけての一帶は大田原町の主要部をなし、上町・荒町・仲町・榮町などの大通が通じて、家並がぎつしりと立込んで居り一番にぎやかな處である。今までかげつてゐた空が晴れたので急にくつきりとそれらの町々が周圍の緑の中に浮き出して來た。所々にまじるトタン屋根が輝いて鋭く光つてゐる。

「向ふに尖の光つた屋根が見えるだらう。あれが郵便局だ。」

「ちやあ家はあの後ですね。」

弟は家の方を一心に見てゐたが、やがて

「お藥師さんはどこですか。」

文政二年（百十六年前　仁孝天皇の御代の年號）

とその眼を遠く西にやつた。下町通の盡きるあたり一際高く茂つてゐる杉の一群が今弟の聞いた藥師堂の森である。赤堀方面は木々の緑に隱れて見えない。

かすかな警笛の音に右手を見ると大久保新道の白い路上をトラックが蛇尾橋の方へとかくれた。

もつと眺めてゐたかつたが晝近くなつたので山を下りた。

第十八課　金燈籠

金燈籠を見るにつけて偲（しの）ばれるものは驛路（うまやぢ）の有様である。この燈籠が建てられた文政二年の頃は、德川時代も末で、攘夷論や開港論が喧しく唱へられ隨分騷々しい時勢であつた。それにつれて、奥州街道も大小の諸大名や武士の往來が繁くなつて、大田原の宿場も大變賑はつた。宿（しゅく）には大名が宿泊や休憩をする本陣と、荷物・人足・馬などを宿から宿へ繼立てる問屋（とんや）とが

傳馬役　宿つぎ馬、公用の馬の世話をする役人
七里役　飛脚

あつて、年寄・傳馬役・定歩行役・水役・七里役などの宿役人が居つた。

行列の通行となると、定紋付の麻裃を着用してそれらの一行をうや〳〵しく出迎へ、そして宿のはづれまで見送らねばならない。

それが大藩の宿泊となり、もしくは御小休ともなると五六百人から千人もの多人數がこの宿に溢れたのである。馬の振る鈴音に調子を合はせるやうな馬子唄が起つて、米をつけた馬匹の群が續くのも、「ほい〳〵〳〵ほい〳〵〳〵。」と勢のよい早籠の掛聲のきこえるのも、又問屋場の前などで「本馬六十三文、輕尻四十文、人足四十二文」などと駄賃を呼ぶ聲がきかれるのもさういふ時である。

春にでもなると、商人が勘定を兼ねてぼつ〳〵奥州から上つて來る。太神樂も入り込む。伊勢へ、金毘羅へ、あるひは善光寺へと團體をつくつて通る旅人の群の動きがこの街道に活氣をそゝぎ入れる。金燈籠は、かうした賑かな宿場の夜になくてはならぬ外燈の役目をつくしたのである。ほの暗い光ではあるが、物堅い町民によつて欠かさず灯される常夜燈であつた。銘にある「町内安全」の文字によつて、奥州路の要驛であるこの宿を平和に平和にと祈つてゐた當時の町民達のゆかしい心掛を偲ぶことが出來る。

金毘羅　讃岐國琴平町金刀比羅宮を云ふ

又一里毘に塚を築き、榎を植ゑて里程を知るたよりとしてゐた當時のことであるから、金燈籠から江戸まで何里とか、隣の佐久山宿や鍋掛宿までは何里何丁とか里程を圖る基準にもなつた譯である。旅人がふところにして歩いた道中記にも、きつとその名が記されたに違ひない。

戊辰の役が起つて、會津藩の引上げ騒ぎ、つづいて官軍の進軍など一しきり賑はつた後は、次第に奥州街道もさびれてしまふと、この金燈籠もいつの間にか人々から忘れられてしまつた。

お城がなくなり、並木に松が次第に減つて昔を偲ぶたよりの少くなつた今日、再びこの金燈籠を灯して見たいものである。

第十九課　蛇尾川

暑い。暑い。

寒暖計の水銀柱が、ぐん〳〵のぼる。午後兄さんと、隣の三郎君と三人で、蛇尾川へ水泳に出かけた。

橋の上まで來たとき、「又水泳か。」

と言つて自轉車で通りぬけた人がある。近所の八百屋の小僧さんらしい。背中のあたりが汗でぐつしよりぬれてゐた。

赤い鐵橋の上に、陽炎がカンカンたつて、ちやうど鐵がもえてゐるやうだ。

大神宮さまの眞黑い森の中から蟬の聲があふれだしてゐる。

河原の山羊も今日は見えない。

やけた石の上を大急ぎで歩いて、裸になるとすぐ水の中に飛びこんだ。

兄さんがラヂオ体操をやるやうなかくかうをして體を動かし始めた。僕も始めた。みると三郎君もやつてゐる。

水の中は芋を洗ふやうだ。泳いでゐる者、立つてゐる者、水の中にもぐる者、もぐつて出る者。

よくみると、先生も泳いでゐる。

しばらくあびてをかに出た。兄さんも三郎君も出てきた。三郎君は寒いといつて體をふるはした。

「今少し深くて廣くれば、よいんだがな。」と兄さんがつぶやいた。

「そして、もつと水が冷たくなけりやよいんだがな。」と、三郎君が言つた。僕もさう思つた。そのうちに先生も上つてこられた。

「いつたいこの川の水はどこから流れてくるのかな。」と三郎君がひとりごとのやうに言つた。

「君は何年生。」と、先生がおつしやつた。「四年生です。」笑ひながら三郎君が答へた。

「あゝそうか、多分五年生になれば習ふと思ふが。」といつて先生は次のやうな話をして下さつた。

大佐飛山、小佐飛山　高林村にあり

「蛇尾川の水源は、大佐飛小佐飛といふ山だ。不思議なことに流れは途中で地の下にもぐつてしまつて、何時何處とはなしに、水がなくなる。

これは那須野はその昔那須噴火山の火山灰で一面におほはれた所だからその土質は砂や石が多くそのために、流水が自然に地の中にしみこんでしまふのだ。」

「しかも夏季大雨の時などは、にはかに激流となつて汎濫し沿岸の耕地に災することが少くない。だから沿岸の土地には水田が少く耕地は畑が多いだらう。」とおつしやつた。

汎濫　水のみなぎりあふれること

水がみんな地の下にもぐつて流れがなくなつてしまふ。いかにも不思議だといふやうに三郎君が首をかしげた。

「一度地下にもぐつた水は再びどこからともなく湧いて、かうして流れてくる。だから蛇尾川の水は他の川の水に比べると、よほど冷たい。」とおつしやつて流れの水をすくはれた。

この時三郎君はなるほど。といふやうな顔をした。

「しかし水が冷たからうが暖からうが、川といふそれだけでも、

どれだけ多くの人に、いろ〳〵役立つてゐるかはもう地理や理科で學んだらう。」と僕に向つて言はれた。僕は默つてうなづいた。

「さあもうひと泳ぎしよう。」先生は立たれた。

ゴーと勢よくガソリンカーが鐵橋の上をすぎた。

第二十課　精靈送り

「ちりん、ちりん、ちりん。」

にぎやかな鈴の音が、念佛を唱へる聲にまじつて聞えて來る。僕は兄さんと一諸に表の通へかけ出した。涼しい風が心地よく僕等の肌をなでる。

薬師堂の方から、精靈送りの行列が、靜かにくり出した。町々から出した船には、それ〴〵思ひ思ひの裝飾が施され、中には、家々で佛前にお供へした物が、眞菰に包まれて積まれてある。香

數珠（佛を念ずる時の具で玉と糸で貫いて作つたもの）

袈裟（佛事の時に衣服の上から肩にかけるもの）

黄泉（死者の靈魂が行く暗黑な世界）

の煙が靜かに立ち上つてゐる。船の前には袈裟を掛けた大勢の老婆が數珠をつまぐりながら鈴を振り、念佛を唱へてゆる〳〵と歩を運ぶ。それに續いて世話人が各々自分の船の前後左右に付き添つてゐる。

「兄さん、精靈送りはどういふわけでするのですか。」

船が僕等の前を通る時、兄さんにきいた。兄さんは精靈送りの行列を眺めたまゝ、

「この間、僕等はおとうさんやおかあさんと一しよに、佛をお迎へに行つたね。今日はその佛をあの船にお乘せして、黄泉へお送りするのだ。」

と、いひながら僕の方に顏を向けて、もとはめい〳〵の家でお送りしたのだが、數年前から、町中が一しよになつてお送りすることになつて、今では此の町の年中行事の一つになつたわ

けだ。」

と、おつしやつた。

僕等もその行列の中に加はつて歩き出した。道の両側は見物の人で、身動も出來ない程だ。金燈籠の所まで來た時、僕はこの間から先生におきゝしようと思つてゐた事を思ひ出して、

「兄さん、盆といふのは佛の祭なんでせう。」

と、きくと

「うん、さうだ。盆といふのは正しく言ふと、盂蘭盆會・魂祭、或は精靈會とも言つて、舊暦七月十五日に當つてゐる。昨日うちへ和尚さんがおいでになつて、讀經をして下さつたね。あのやうにどこの家でも、此の日には、佛の供養をして、祖先の冥福を祈り、報恩の心を表すのだ。

と教へて下さつた。

供養　佛前に物を供へ回向すること

冥福　死者の幸福

兄さんに盆の説明をしていたゞいてゐる中に、行列はもう蛇尾橋のたもとに着いた。

河原には、香の煙が幾條ともなく立ち上り、數多の松明が赤々と燃えて、薄暮の河原を照してゐた。間もなく式も終へて見物人はそろ〳〵歸りかけた。

第二十一課　火力發電所見學

油じみた作業服の職工さんに案内されて事務室に通された。入口の側で一人の事務員が電話にかゝりつ切りで忙しさうだ。主任さんは机上の設計圖を仕舞はれながら愛想よく機械室へ立たれた。

何といつても原動機の大きいのには驚かされる。長さが五米、高さが三米、そして幅が二米もあらうか。これが二台、眞中にどつしりと据ゑられてゐる。デーゼルエンヂンといつて重油を

デーゼルエンヂン　内燃機關

發電機　電氣を起す機械

馬力　毎秒七十五瓩のものを一米引上げる力

キロワット　電力の單位一ワットの千倍

水力發電所　黒川（伊王野村）西鬼怒川（塩原町）赤川（塩原町）等十箇處にある。

燃して機械を廻し、その力で發電機を動かす大事な機械なのである。そしてそれ〴〵の原動機には、直結されてき大な發電機が据ゑてある。この中の廻轉軸が一分間に三百七十五回もの速さで廻る事や、一台で三百馬力の力の出る事、二百キロワットの電氣の起される事等を聞きながら、ほんとによく見せていたゞいた。何故休んでゐるのだらうと思つて尋ねると、

「この火力發電所は渇水時或は其の他水力發電所に故障等が出來た時の補給用として建設されたもので塩那電氣株式會社唯一つの火力發電所ですから容易に使用する時はありませんが、何時でも補給電氣が直に起せるだけの準備がしてあるのです。」と靜かに説明して下さつた。

今日は物すごい運轉振りが見られないのかと考へると殘念だが、なか〳〵面白い重い役目をもつてゐるのだと思つた。

重油貯藏タンク　重油をしまつておく大きな油槽重油は原油を三百度以上に熱すると出來る

スヰッチ　電流を斷續する器

更にこの大きなデーゼルエンヂンを三分位で廻せる爲めの設備だといふ始動用空氣タンクや、油を注ぐポンプ、水を送るポンプ等を見、或は直徑八米、高さ三米位の大きな重油貯藏タンクを窓外に見ながら、一廻りして行くと、赤や青の電燈のかげにぎつしりスヰッチの並んだ大理石板があつて、ウンウン〳〵といふ無氣味な音がしてゐる。「黒磯」「佐久山」「大田原」「夜間」等と書いてある札が目につく。これが配電盤といつて各地方へ一定の電力がきちんと送られる仕掛になつてゐる。

このスヰッチ一個で大田原町全体の電燈を點けたり消したり自由に出來るのだ。

配電盤の裏へ廻ると一隅に電力配電事務室があつて、事務員が一心に働いてゐる。室内が強い電氣づくめだと思ふと身のすくむ様な感じがした。説明されるまゝに外を見ると蜘蛛

の巣の様に電線が張つてある。こゝが變電所で、玉生や氏家等各地方にも全部で六箇所あるのだなど主任さんの親切なお話に感謝しながら外へ出た。

第二十二課　乃木神社

大きい石の鳥居をくぐるとおのづと森嚴な心地になりました。

二つ並んだ碑が斜に短い影を苔の上へ投げてゐます。掃き清められてひつそりとしたお庭を、社務所の方から神主がこちらへお出でになられます。

きれいな小石を敷きつめた參道は秋の光を吸つて白々と續いてゐます。

白木造の拜殿には幔幕がめぐらしてありました。

拍手が靜まり返つた境内にこだましします。おのづから頭が垂

れるのを覺えました。

あたりは鬱々とした自然木に彩られて居りました。數多い献木がこゝかしこにすく〳〵と伸びてゐます。

宮さまの御手植の松のみどりが一入目立つて見えました。

戰勝記念物等を拜觀しながら林の中へ入ると爽かな空氣が流れてゐて、朴の落葉には露かたまつてゐます。

本殿の裏から樹蔭の細い徑を奥の方へまゐりますと舊乃木邸の裏門がございます。古木に蔦がからみついて何となくもの寂びた奥ゆかしさが漂つてゐます。

門のすぐ後には愛馬塚がありました。畏くも明治大帝から將軍に御下賜になられた愛馬の塚で、一かゝひ程の石に刻まれた「殿號」の文字が見えます。

あたりには澤山の栗の若木が實をつけて居りました。

舊乃木邸は昔ながらの面影をとゞめて居るとのことでございます。お百姓になりきつた將軍の日常の御生活など偲ばれて勿体なく思ひました。遠方から來られたらしい數人の參詣人が居りました。

明け放たれたお座敷には將軍の御肖像が掲げられてありました。

御別邸の前にはひろ〳〵とした實つた稻田が續いて居ります。

お池の向ふは神社の齋田で一目にもそれとうなづかれる程よく手入がされてありました。

邸の北側に御神泉がございます。

將軍遺愛の清水で　畏くも今上陛下攝政の宮に在らせられました御時親しく玉歩を運ばさせ給ひ御賞覽遊ばされた所

でございます。

老木に渡した注連繩が風にゆれて居ります。今までに見たことのない蒼く澄んだ清冽な泉がこん〳〵と湧いて居るのです。

乃木邸の前に休憩所が設けられてありました。一人のお婆さんがつゝましやかな手つきでお茶をすゝめて呉れました。

店には繪葉書や乃木羊羹など色々な御土産ものが並べられてありました。

第二十三課　那須野原

那須野原といふ言葉をきくと私は遠い昔を想ひ出して懷しい氣持になつて來る。それは到る所に名所舊跡があり、床しい傳説が多いからであらう。

「田畑もなければ流れもなし。又道路もなかつた頃の那須野

原は、全く寂しいものであつた。大田原から關谷までは一軒の家もなく、路といふ路もなく僅か一筋の野路があるにすぎなかつた。鹽原溫泉に行く者は、大田原の茶店で腹ごしらへをして、この廣大な那須野原を旅したのであつた。」と私は祖父からきかされてゐる。

枯尾花の上を冷たい風が吹く頃になると那須山は眞白な雪におほはれてしまふ。こんな寒い冬の日、霜枯れた草をふみつゝ那須野原を過ぎる旅人を想像して見た。

建久四年（後鳥羽天皇の御代の年號約七百四十年前）

建久四年四月將軍頼朝が十萬人程の家來を連れて吾が那須野に卷狩をし狐・狸・熊・鹿等の數二千三百餘頭を獲たといはれてゐる。そして今日の狩野の地名もこの時から起つたものであると傳へられてゐる。

今はその雄大な面影はどこに殘つてゐるだらうか。殆ど大

部分は田畑となつてゐる。森あり、流れあり、村落あり、町あり那須野原の面影を慕つて旅する人はおそらく那須野の大發展に驚くことだらう。東北本線がこの原を貫き、汽笛が朝霧を破つてきこえる。大田原・西那須野・黑磯等の町を中心として道路が發達し、町から村へ、村から町へ頻繁に往復するバスの發達はすばらしいものである。

狐なく那須野原も今年より
　稻葉そよぎて秋風ぞ吹く

この頃の那須野原と現在の那須野をくらべて見ると、實にその發展に誰しも驚く事であらう。殊に黑磯・那須溫泉間の道路の立派な事、關東一と言つても過言ではない。

秋晴れの或日、私は父に連れられて那須溫泉に行つたことがある。その日は日曜のせいか割合に汽車の中は混雜してゐ

た車窓より見える林ははや紅葉してゐた。東西約二十四粁、南北約四十粁の雄大な那須野原は大分開墾された。車窓の兩側はすべて田や畑ばかりである。東那須野を過ぎ、黑磯驛に着いたのは午後四時近くだつた。「こゝは那須野原東部の中心地で最近非常に發展した町だ。」とお父さんはおつしやつた。アスファルトの道を少し行くと有名な晩翠橋にかゝる。那珂川の上流にかけられた橋で、流石立派なものである。塵一つなく凹凸もなく、天下に誇る那須街道はまことに乘心地がよい。松子・廣谷地・守子坂と那須野原からいつしか那須火山の裾野にかゝる。粟や陸稻の畑が見える。雜木林の伐られた跡に薄がそよいでゐる。風流な將軍實朝卿が「霰たばしる那須の篠原」と詠じた趣も、九尾の狐のあの傳說も今なほこゝにふさはしいと思つた。

右に御用邸を拜しつゝ、急な坂を登りいよ〳〵湯本に着いた。自動車を降りたら足がすくんでちよつと歩けなかつた。

お父さんは思ひ出したやうに「やあ素的だなあ。」と前面に展開された大那須野原を眺めてゐる。

雄大といはうか豪壯といはうか實に壯觀である。私は兩手をあげて思はず「萬歲」と叫んだ。那須野の彼方には八溝の連峰がくつきり空に浮き立つて見える。眞白い道が一筋見えるのは、今私達の登つて來た道だ。

懷しい大田原町も彼方にチラ〳〵見える。

「お父さん、こゝからは那須野原が一目に見えますね」あれが大田原町ですよ、私の指さす方を眺めたお父さんは「成程隨分遠く見えるな。」と眼鏡の緣に手をかけられた。

今この雄大な那須野原は黃昏れんとして、早や夕靄が立ち初

めた左手の山には夕陽が赤く照り映えてゐる。

第二十四課　和歌と俳句

武士の矢並つくらふ小手の上に　源實朝

霰たばしる那須の篠原

下野や那須野に茂き篠をこり　下河邊長流

あづまをの子は矢にぞはくなる

道おほき那須の御狩の矢さけびに　藤原信實

のがれぬ鹿の聲ぞきこゆる

野を横に馬牽むけよほこゝぎす　芭蕉

田一枚植ゑて立去る柳哉　芭蕉

木啄も庵はやぶらず夏木立　芭蕉

第二十五課　聖蹟

一　皇太子殿下行啓記念碑

大正天皇が皇太子殿下にましませし御時、塩原御用邸に行啓の砌、教育並産業奨勵の御思召をもつて、本縣内を御巡視の御途すがら、明治四十三年九月六日、栃木縣立大田原中學校におなり遊ばされました。大田原中學校にては此の光榮を永久に記念し奉らむが爲に、昭和六年四月十九日同校内に皇太子殿下行啓記念碑を建設致しました。

碑は正門を入ると、正面の松の一群ある中に建てられてあります。老松は枝を交へて此の碑を覆ひ、森嚴にして、そゞろに當時を偲ばしむる様な感が致します。

鳳輦　天皇乗御の御車又は御輿の屋形の頂に黄金の鳳凰の飾がある

二

明治天皇御駐輦之地

金田村大字乙連澤北久保舊陸羽街道北側の高地に、明治天皇御駐輦の御遺蹟がありまして。

金田村は昭和三年此處に記念碑を建設致しました。

大いなる碑は、六尺四方の垣の中に、自然石の礎石の上に据ゑられ街道との間は石階二十三級を以てしてあります。

往時植ゑた並木の老松は枝を四方に張り、碑面に刻んだ　明治天皇御駐輦記念碑の文字と相映じて、其の勝景は實に雄大なるものがあります。

此處は明治九年六月十二日　天皇奥羽御巡幸の砌、鳳輦をお駐め遊ばされた所で、東北に續いてゐる窪地に、此の地方産の若駒を叡覽あらせられて産業を御奬勵遊ばされた所であります。越えて、明治十四年七月、北海道へ行幸の御時にも再び、御小憩あらせられたのであります。

三

明治天皇御駐輦御遺蹟

明治九年六月　明治天皇が東北地方御巡幸の砌、六月十一日親園村大字親園御通過の御時、産馬共同會社に、御立寄遊ばされ、御小憩の際親しく産馬の狀況を御下問あらせられたと拜承致します。

この光榮を永久に記念し奉らむが爲に、大正四年記念碑が建設されたのであります。

第二十六課　飛行機

人間は大昔から空を飛ぶ事を大變良いことだと考へ、又飛びたい、飛んで見たいと強い慾望を持つてゐました。ですから神

様や佛様や天女と云ふやうな人間以上の立派な方は皆空を自由に飛べる物と信じてゐました。神様、佛様の繪の中には空の上を飛んでゐるお姿が澤山ありますし、日本や外國の神話の中には神様が空を飛んだといふお話があります。

そこで、人間もどうにかして自由に飛ぶ事が出來ないものかと、一生懸命になつて智慧をしぼつて、こう〳〵空を飛ぶ機械を發明したのです。

最初に機械を工夫したのは約九百年も昔であつたさうですが完全に成功したのは僅か三十五年位前のことであります。その間の長い〳〵期間、私達の祖先は、先輩は失敗につぐ失敗、慘死又慘死といふ言語に絶する苦心をして來たのです。人間が自然と戰ふ武器は智慧と意志とであります。この二つの力をもつて前には陸と水を、そして遂には空までも征服してし

まつたのです。

私達は飛行機は外國人の考へたものゝ樣に思ひますが、これが發明に寢食を忘れて努力した貴い先覺者の中に我が日本人のゐることを忘れることは出來ません。それが種々の障碍のために遂に外國人に名をなさしめたことは非常に殘念に思はれます。

しかし今日では製作上の技術といひ操縱の腕前といひ實に優秀で外國に比べて優るとも劣らぬものになりました。

我國の飛行界がまだ總てに幼稚であつた頃、それは約二十年前のことでありますが、モーリスファールマン式といふのが金丸原演習場に飛んでまゐりました。それが大田原町と飛行機とが親しくなつた始めであります。辨當持ちの見物人が毎日わい〳〵詰めかけましたが雨に妨げられて二日も三日も

遲れてやつと飛來した樣な有樣でした。それから軍用機の野外演習が引續いて多くなり、各種の飛行機の勇姿を眺められるやうになつたのであります。

そして今日では、一年中爆音をきかぬ日はないといつても好い位です。空に爆音のない日はさびしい位になつて居ります。

ですから、大田原町の人達は爆音によつて機種を判別したり、又同じ機種の中にも、改良・發明の年次によつて、九一式、九二式とか九四式等の別があることや、編隊飛行の樣式とか、或は高等飛行術の名稱など隨分詳しい智識を持つやうになりました。

烈風のすさぶ中を縱橫無盡に翔ける戰鬪機の輕快さ、漆黑の夜空を縫ふ偵察機の沈着さ、雷雨を衝いて唸る爆擊機の豪放さを常に眺められる幸福を持つことが出來るのであります。

性能　生れつきの働
參與　事にあづかる
貢獻　世の中の爲につくす
報酬　謝禮の金品

つまり、大田原町の人達は活きた飛行機發達史を知つてゐるわけであります。

しかし、かやうに親しんでゐる私達も爆音をきく度に必ず空を仰がずにはゐられないのです。そして胸のときめくのを禁じ得ないのです。

それはきつと人間の飛びたいといふ慾望を滿たしてくれるものであり、學問の力が自然を征服したよろこびを表してゐるからでありませう。

第二十七課　職業の話

職業とは人が其の性能に應じて、共同生活の或部門を分擔して、之に參與し、貢獻し、そして通常之によつて、報酬を受け、其の報酬によつて生活を維持し充實して行く所の繼續的勤勞である。社會共同生活の運營上や、又自己の勤勞によつて生活を

維持（ささへもつ）　充實（みち足る）　運營（めぐらしいとなむ）　選擇（えらぶ）　分業（それぞれ分れて業を營む）　精通（くわしくわかる）

立てゝ行く点に於て職業は大いに尊重すべきものであり、各人が其の職業を自覺し、專心其の職業に努力することによつて社會生活は健全になり、個人生活は安定するものである。

從つて職業を選ぶことは人の一生にとつて、極めて重大な事柄である。若しこれが選擇を誤つたならば非常な損失を招くか、或は生涯の不幸を見ることを覺悟しなければならい。世の中が進歩するに隨つて職業の種類も增加し、又一つの職業も分業の發展につれて更に幾つかの職業に分れる。

かやうにして職業の種類は非常に澤山になつたが、職業を選ぶには誰でも先づ是等に就いての知識がなければならない。

尤も澤山の職業の總べてに精通するといふことは出來ないが、大体の分類や其の大勢と各の性質に就いて豫め知ることは極めて大切な事である。職業の分類の仕方には種々あつて、

資料（もとで）　牧夫（牛、羊などをかつてゐる人）　捕獲（いけどる）

まだ充分な研究が遂げられてゐない。我國では國勢の現狀を調べるために、國家が大正九年と大正十四年と昭和五年とに行つた國勢調査の職業分類法が一般に行はれてゐる。今年の十月一日は、第四回目の國勢調査日であつたがこの結果は又新しい職業が增加することであらう。

國勢調査の分類法は我國の職業を農業・水産業・鑛業・工業・商業・交通業・公務自由業・家事使用人・其の他の有業者・無職の十種に大別してゐる。

農業は土地や自然力を利用して衣食住の生活資料を生産する職業であつて、農夫・植木職・牧夫・炭燒等の從事してゐる職業群である。

水産業は水中から生活資料を得る職業であつて、水中の動植物を捕獲する漁夫や養殖に從事してゐる養魚家などの職業

養殖（やしなひふやす）　採掘（さくくつ）

群である。鑛業は地中にある鑛物や石炭を採掘し石油を汲取り土砂を採取する職業であつて、鑛夫・採炭夫・土砂採取夫等の從事してゐる職業群である。

工業は農業・水産業・鑛業等で得た原料に人力や機械力を加へて細工し、精製して生活に一層役立つ物とする職業であつて、職工・大工・左官等の從事してゐる職業群で其の範圍は極めて廣い。

範圍（はんい）

商業は農業・水産業・鑛業・工業等で生産された諸種の品物を賣買して有無相通じ又之を助けるための金融・保險並に接客業を包括した職業で、店員・賣子・銀行員・保險勸誘員等の從事してゐる職業群である。

金融（金錢の融通）　保險（損害をつぐなふ保證）　包括（まとめてひとくくりにする）　勸誘員（すすめる人）　旅客（たびびと）　輸送（はこびおくる）

交通業は旅客や貨物を輸送し郵便・電信・電話等で人の考や金錢を傳へるための職業であつて車掌・運轉手・飛行士・電話交換手・郵便配達夫等の從事してゐる職業群である。

公務自由業は共同生活に必要な事務や思想を主とする職業であつて、官吏・軍人・醫師・教師・記者等の從事してゐる職業群である。

書生（もの學びする人）

家事使用人は他人の家に雇はれて雜務をする職業で書生・女中・子守等の從事してゐる職業群である。

其の他の有業者はこれまでの分類の中に入らない職業であつて、給仕・番人・雜役夫等の從事してゐる職業群である。

恩給（多年勤續して職務を去りたる官吏に、終身給與する一定の金）　扶助（たすけ）

無職は、自分の勤勞によらない收入例へば小作料・地代・家賃・恩給等で生活する人や又は保護者の扶助によつて生活する學生・生徒等である。

以上で職業の種類や性質の大體は會得したことであらう。次に職業を選ぶにあたつての注意を二三述べよう。

吟味（よくしらぶ）　興味（おもしろみ）　經濟（一身一家一國の費を省き富を增し、生計を成すこと）　境遇（身のなりゆき）　精勵（よくはげむ）

人には得手不得手があり、又體力や教育の程度、家庭の事情等も各人各樣であるから、選擇には種々の方面にわたつて十分に吟味しなければならない。

先づ性能や興味に合した職業を選ぶことが第一であるが、經濟上の問題や境遇上の事柄、職業界の事情等もよく考へ、將來に悔を殘さぬやうに心掛けなければならない。而して唯一つの職を選んで終世改めない覺悟が大切である。

以上の諸項を十分に考へて選擇し倦まず撓まず精勵し、その日〳〵を愉快に送り、自己の努力が社會國家に役立つならばそれは眞に生き甲斐のある生活である又それこそ最もよく選擇に成功した人といふべきである。

第二十八課　城鍬踊

大田原藩第十代の藩主は資淸公といひ、中興の英主として仰

天文十二年（今から約四百年前後奈良天皇の御代の年號）

耒耜

がれた方であつた。天文十二年龍體城を築き、始めてこの地に移られたのである。

いよ〳〵お城をお築きになるといふことを聞いた領民等は、早速大勢馳せ集つて來て、毎日々々一生懸命工事に從事した。東は蛇尾川をひかへ、西は廣々とした那須野原につゞいた要害の地、龍體山上に堂々と建てられたお城を望んで立つた時、お殿樣を始め藩中一同はどんなにお喜びになつたであらう。毎日工事に從事してゐた領民達の喜びも又一通りでなく、いよ〳〵お祝の日、宴の果てる頃になつて、石神村藤兵衛といふ一人の農夫が喜びの餘り、耒耜を叩きながら舞を始めた。こつけいな手ぶり身ぶりをして舞ひ出したので、大ぜいの人達も一度にどつと笑つた。この時のこの舞がもとゝなつて色々に工夫され、城鍬踊として後の世までも殘されたといふこ

ことである。

踊は二十餘人が一團となつて皆揃ひの獅子舞姿、美しく飾られた小さな未耜を手に持つて、笛や太鼓に合はせて、調子も面白く踊り出すのである。實に元氣のよいにぎやかな踊であつたが、維新以後はだん〳〵こおろへて今日では全く見られなく、たゞ昔語の一つとなつてしまつた。

第二十九課　招魂社

大田原町招魂社は町の東北方にあたる上の山にあつて大田原神社に接してゐる。

境内は土地高燥であつて多くの櫻樹を植ゑ、春は爛漫たる櫻花を咲かせ、まことに花は櫻木人は武士の言葉の如く國家のために櫻花の散るやうに命を捧げた人々が思はれる。

また東には蛇尾川の流れがあり、遠く那須岳の噴烟を見る。

西より南へかけては大田原町を見おろし、遠くは日光の山々、高原山の連峯を望み更に那須野の平原を見わたすことが出來る。

招魂社は明治戊辰の役に戰歿した人々をはじめ其の後明治二十七八年の日清戰役、明治三十七八年の日露戰役其の他の事變等に於て國家のために一命を捧げたところの勇士の魂を祀つたのである。

この招魂社は明治十二年に建立せられ厚く町民の尊崇するところとなつて、毎年秋季に於て盛大なる町祭を行ふのであるが、大弓會・柔劍道の仕合その他の餘興が賑かに行はれ勇士の英魂を慰めるのである。

國のために一命を捧げることは忠勇義烈たぐひ無きものであつて國民として立派に本分を盡くしたことであり、此の

上もない名譽である。われらはかかる忠勇の士を永遠に尊崇しその義烈を追慕すると共にその志を繼ぎ、忠良なる國民となり以て國運發展のために力を盡くさねばならぬのである。

第三十課　大田原小學校の歴史

大田原小學校は今より凡そ六十餘年前明治六年十二月七日大手町に校舍を設けて開校されたのであつた。

翌年五月不幸火災にあひ校舍が燒失してしまつた。依つて舊大田原藩所屬の御作事跡に移り劍道場で學習し、更に洞泉院の本堂に移轉せしこともあつたので隨分不自由を感じてゐた。

創立當時は生徒數も少く、僅か三人の先生であつたが、次第に隆盛におもむき、同二十年には高等科も併置された。越えて二十三年には　御眞影、勅語謄本を拜戴して、感激に滿つると共

に一層の覺悟を持つた。廓内に敷地を得て、二階建の校舍が新築されて移轉したのは明治二十五年八月であつた。これが現在の一校舍で當時郡下にほこる建物であつた。

大田原尋常高等小學校と改稱されたのはその翌年である。このやうに年々向上し發展するにつれて增築されたのが二校舍三校舍である。

大正九年には四校舍と講堂が出來上り、設備は益々整つた。四大節の擧式も卒業式もすべて、この立派な講堂で擧げられるので、その便利なことに誰も感謝した。

この校舍と講堂の落成式は極めて盛大なもので、全町擧つてのお祝ひであつた。

「こんな大きな講堂が出來ては、もう大丈夫だ。いくら生徒がふえてもこゝ一つばいになるまい。」等と語るものもあつたが、そ

れが今では狹くて困るほどに增加してゐる。

四校舍裏は一面に水田であつたが、間もなく敷地となり、校舍が建てられた。これが五校舍である。

かくして縣下でも稀に見る大きな學校となり、先生も生徒も眞劍に努力して來た結果成績はます〳〵向上し遂に縣の指定研究學校となつたのである。最近にいたつては生徒數益々增加し敷地擴張せざれば充分に身心の鍛錬をすることが出來ない狀態となつたので、同窓生一同相談の結果父兄と協力して出來たのが廣い〳〵東校庭である。同時に正門前に尊嚴なる　御眞影奉安殿も建設された。この大事業を永久に傳ふるものは「處萬變主一敬」の記念碑である。校庭を飾る大銀杏も櫻の大木もみな同窓生の記念木である。

創立當時より現在までに約八千七百人の卒業生があるその

中には政治家も軍人もある。第一回の卒業生で今も健全で町の爲に盡力されてゐる方もある。又現在までに二十一人の校長先生をお迎ひもしお送りもしたが、その中にはずゐぶん悲しいお別れをせねばならぬこともあつた。

鈴木先生は二十二代目の校長先生で四十六人の先生と二千三百の生徒は父親の如くにしたしんでゐる。

先生がお見えになつてから特に鄕土教育の振興に、職業指導の實際化に盡力されてゐる。今年は縣下にほこる校舍が落成されていよ〳〵立派な學校となる。

私達は我が學校を愛すると共に協同一致本校繁榮のために盡力すべきである。

第三十一課　金枝柳村

井伊直弼が大老職をやめ、谷文晁が此の世を去つた頃先生は

安積艮齋　奥州二本松の人、德川氏の儒臣、萬延元年歿年七十一

學館教授　學校の先生

武田耕雲齋　攘夷論者幕府のために處刑された年六十二にて

生れたのです。幼時は勝次郎といつて大變孝行者でした。後に彌五左衛門と改め、祖先は那須與一宗隆です。お父さんは資興といつて大田原藩主に仕へ江戸に行つて居りましたが或事情のために職をやめたので家の生活が困難になつて來ました。この中にそだつても讀書に一生懸命な少年でした。年十八の時あの有名な安積艮齋について夜となく晝となく勉強して二十三才の時大田原に歸り、學館教授になり、藩士の人々を心から教育しました。明治維新に大政奉還の議が起ると先生は大田原藩の意見をまとめて進んで王政に復さるゝ樣申出方を藩主に願出でたのです。版籍奉還の後に朝廷よりお金を戴きましたが其を分ける時に上の人に輕く下の人に重く自分の身を忘れて骨を折りました。これより先、元治元年十一月水戸藩士武田耕雲齋兵を率ゐて京に攻め入らうとして鍋掛

驛　宿場

脫兵　にげた兵

驛に宿つた時に先生は藩の命を受けて耕雲齋に會ひ、大田原領に一歩も入れさせない樣に致しました。明治戊辰に鳥羽伏見の戰が始まると直に江戸に行つて藩を擧げて、天皇の御ためにお盡くし申すことを誓ひました。

會津征討の役には水戸に逃れやうとした脫兵を片府田に向ひ討つて戰功により戰砲一門を戴きました。

先生或時自分の子弟にお話になるのに「學問をして知識を充分に養へ。武術を練磨して正氣を壯にせよ。世の中はますゝ複雜になつて來るから、常々此の心掛を忘れてはならぬ。」と。七十年前すでに先生には大田原町の人々に日本精神をふみ行なつて、活きたお手本を示された人と言ふことが出來ませう。

第三十二課　甚兵衛と狐

高原や那須の嶺々がすつかり雪に蔽はれて毎日のやうに

粉雪が麓の村にちら〳〵と降つてまゐりますと、町も村もなく鐵道もかゝつてゐなかつた頃の那須野原は全くものさびしい人氣のない原になつてしまふのでした。

獸たちは此の頃になると餌がなくなり里近くまで寄つて來るのですが、里の人達はそこをねらつて、わなにかけたり火藥を使つたりして捕へますので、獸たちは大層おびえて居りました。

或日のこと、親狐が子供達を集めて言ひました。

「ねえ、よくお聞き。近頃萱とかつゝじの株の陰などに、そつとかくされてゐる竹の筒があるでせう。あれはね。ぶん〳〵よい香がしてゐますが、實は命とりの魔物なのですよ。あの筒の中にはおそろしい火藥が一ぱい詰つてゐて、その先にある鰐をいきなりばくつとやらうものなら「どーん」とばかり

口を割られてしまうんですよ。だからねどんなにお腹がすいても決していやしい眞似はしておくれでないよ。みんなよい子だからね。子供達は皆恐いこいふ顔をしてうなづいて見せました。

やがて原がすつかり雪になつてしまひ、日毎に餌がなくなりました。ですから、口を割られて捕へられる狐の數はすこしも減りませんでした。この竹筒を用ひて獵をする名人に甚兵衛さんといふ人が居りました。さら〳〵と氷つたやうな雪の降る或る夕方でした。圍爐裏の側でせつせと獵の用意をしてゐますと

「こん〳〵こん〳〵」と土間の板戸をたゝく音がします。開けて見ますと一人の坊さんが立つてゐました。笠で顔は見えませんが破れ衣は雪にぬれて、見るからに寒さうな老僧です。

「雪に難澁して居ります。お泊め下さらば冥加に存じまするが……。」

さびた聲でさう賴むやうにいひました。人の好い甚兵衛さんのことですから

「へえ……、よかつたらお泊んなせいよ。」と氣輕に泊めてやることにしました。

爐の火がばつと燃え盛つて、お坊さんのとげ〳〵した顏が急に明るく見えました。甚兵衛さんは温い物をふるまつたり、ねれた衣を乾かしてやつたりしながら世間話に夜の更けるのを忘れてゐました。その中に話がだん〳〵獵のことになつて行きますと、お坊さんは大層改つてかう訊ねました。

「お前さんは大變腕が達者のやうにお見受けいたしますが、一日にどの位獲れますかね。」

「左樣……、大したことも、ねえが、まあそれでもこんなくだらねえ仕掛で七つ八つは外したことはねいだよ。ほらこんなつや〳〵した若い狐をね。」と壁につるりと乾してある毛皮に眼をくれながらさも得意げにさういひました。坊さんは「しかし、いくら商賣とはいへ、生物の命をむざ〳〵奪ふことはまんざら好い氣持では御座るまい。ましてまだ若い狐などを捕つた時などはまさかに親の心につまされることも御座りでせうな。子を思ふ心は人間も鳥獸も變らぬでな。」

「そりや知つてまさあ、これまでに、わつちの手にかゝつた畜生はいくらあつたか知れやしない。この年をしてまさか後生を考へねえ譯ではねえが商賣となりやあ、又そこは別でしてね。」

「御もつとも、御もつともではあるが佛に仕へるこの身にと

れば、お前さんのなさることや心掛けがそゞろおそろしいものに思へてならぬ。泊めていたゞくも何かの縁ぢや。お前さんの後生を安樂にして進ぜようと、お禮心に申したまで……しかし殺生戒を破るものは地獄に墮ちるとの御教……南無阿彌陀佛……。」坊さんは訴へるやうに、又つぶやくやうに申しました。甚兵衛さんはぢつとお坊さんの顔を見てゐましたが

「するとわしに商賣をやめろといふんだね。」といひました。

「いや〳〵おやめなされとは申しますまい。」

「するとどうすりや好んだい」甚兵衛さんはすこしおそろしい心に促はれてしまひました。

「せめて子を捕ることだけは御遠慮下さるまいかの……。」

「……。」甚兵衛さんはだまつてお坊さんの顔を見つめて

ばかりゐました。やがて枕を並べてやすみました。

夜明け近くでした。甚兵衛さんは戸を洩れる寒い風にふと眼をさましました。すると勝手の方でかたんかたんぼかんぼかん」といふはげしい音がしてゐます。眼がさめたのはこの音の所爲だつたかも知れません見ると寢てゐる筈のお坊さんが居ません。

「おやつ」と思つて、音のする方へおそる〳〵寄つて行きました。そしてそつと勝手の戸をあけて見ました。すると雪明りにはつきりと見えたのは、何と昨夜のお坊さんの姿でした。なほもよくみると鯰を入れておいた瓢簞に首を入れて、しきりにもがいてゐるではありませんか。近よると逃げやうとして柱や壁に打ちつけますが瓢簞は決して破れません。

そして苦しがつて騷ぐうちに、何時の間にか衣の破れ目から

はぼつさりと太い尾が出てゐました。

「やゝこりや何だい。何てえ淺ましい奴だ。あは……だがおかげで寒い思ひもしねえで、又立派な毛皮が一枚ふいたといふわけか。あは……。」

甚兵衛さんは昨夜のもつたいぶつたお坊ちんの言葉を思ひ出しながら、家中に響くやうな聲で腹の底から笑ひこけました。

しかしそれからは、此の那須野原には狐がゐなくなつたといふことです。

第三十三課　專賣所

宇都宮地方專賣局大田原出張所は町の西方榮町にある。明治三十一年葉煙草專賣法實施に際し設置され、主として葉煙草の收納に從事してゐる。大きな倉庫には乾燥された葉煙草が整然と積み重つて貯藏されてある。この乾燥葉煙草は必要に

乾燥（ほしかわかすこと）

應じて、煙草製造場に廻送される。廻送先は、仙臺・東京・郡山及び各地の製造場である。

昭和九年度主な廻送先を示せば左の通り

專賣所名	品種	廻送量	製造原料
郡山	達摩種	九四、〇九五瓩	刻原料
仙臺	同	二一〇、三九〇	兩切原料
名古屋	同	七六、二一二	口付兩切原料
東京	同	九一、五一四	同
廣島	同	四四、四六六	同
德島	同	八一、一〇〇	刻原料
大阪	同	七〇、三四二	兩切原料
熊本	同	七五、三三七	刻原料
宇都宮	同	四二、〇〇〇	同

初旬　月のはじめ
本圃　苗床にたいして畑をいふ

展葉　葉のし
包裝　物のうばつみをすること
賠償金　ここでは葉煙草の代金をいふ

然し貯藏されるまでには、耕作者は隨分苦勞するとのことである。三月の初旬苗床に種子を蒔き、田植の頃本圃に移植する。生育期間中の管理が煙草栽培者にとつて、最も大切な作業であり、殊に害蟲驅除の一方法として「枯葉立込」を行ふのであるが、之れは栃木縣で規定された害蟲驅除法で必ず怠ることが出來ないとのことである。移植後八九十日たつて成熟するので蒸暑い夏の日に收穫し、約一ケ月もかゝつて乾燥し農閑の際濕氣を與へて展葉を行ひ包裝して專賣所に納付するのである收納日は耕作者にとつて最も樂しい、一ケ年の苦勞が報いられて澤山の賠償金を得られるからである。

收納日はなか〳〵にぎやかである。耕作人が朝早くから馬や車に澤山つんだ葉煙草を、西からも東からも運んできて、さしもに廣い專賣所通りは見る〳〵うちに一つぱいになつてしまふ。

鑑定　物の善惡を見定めること

先づ受附の順に現品の排列をする現品排列が終るといよいよ係員によつて鑑定が開始される。現品が「トロツコ」の如き運搬臺によつて、圓形の軌道をすべつて、鑑定係の前に達する。二人の係員によつて鑑定され、秤量檢査係に廻送し、この檢査がすむと、更に現品對照をする。現品對照の後耕作人は自分の納付した煙草について誤りあるかどうかをたしかめた後、賠償金の請求書を出して、支拂を受ける順序になつてゐる。この檢査中に二十五瓩の定量に分け、壓搾機によつて充分壓搾包裝して後貯藏するのである。

この作業は僅の係員によつて行はれるのであるが、すべてが分業化されてをり熟練されてゐて、一日に八百俵から九百俵の檢査が出來るとのことである。

大田原專賣所の收納區域は大田原町外三町七ケ村耕作反別六百二十六町九段歩、その收穫量目壹百參拾八萬貳千七百八拾六瓩となり、この賠償金高は八拾萬四千壹百餘圓といふ莫大な金額である。

アルカロイド　植物中にある窒素をふくむ鹽基性化合物で毒性を有し、藥用にする

煙草は米國の原産でアルカロイドの一種ニコチンを含み、嗜好品として世界中到る所で愛用せられ、從つてその産地も廣く、殆ど世界各地に亘つてゐる。最近の世界産額は戰前に比して約四割の增加で人口の增加よりも遙かに多いことである。

一國としては我國などは比較的産額が多いが之をもつて國内の需要を充すことが出來ず年々煙草の爲に外國へ支拂ふ金額も少くない。

慶長　後陽成天皇、

我國に初めて傳はつたのは慶長の頃だといふ記錄がある。それからまもなく九州地方に廣まり需要の多くなるにつれてたちまち全國に普及したのである。

後水尾天皇の御代の年號、秀吉、家康、秀忠の時代

栃木縣に於ける煙草栽培は極めて古く、今を去る三百十餘年前元和二年馬頭町香林寺の住職が上野の國より種子を携へて歸り、字寺中に栽植したところ香味の優つた良品が出來た。

元和　後水尾天皇の御代の年號、秀忠、家光の時代

當時この煙草を寺中煙草と稱した。之が本縣煙草栽培の始であつて、これを記錄した記念碑がある。

創栽碑

寛永二年德川家光が全國著名の物産取調の際に高評を博してから競つて栽培するやうになり、縣下全般に廣まり今では重要特産物となつてゐる。しかも本縣産の煙草は野州達摩と稱し著名な品種として賞讃されてゐる。

葉煙草賠償價格表

等級	一瓩當賠償價格

	内地種	米國種	備考
一等	二、一〇錢	一、八四錢	一等ニ優ル葉煙草ガアルトキハ優等トシテ
二等	一、八二	一、四〇	一瓩當
三等	一、五四	一、〇四	内地種　二、五〇
四等	一、二六	〇、七四	米國種　二、三〇ノ賠償價格ヲ以テ收納ス
五等	一、〇二	〇、五〇	大田原出張所ニ於テハ四等以下ノモノガ多イ
六等	〇、七八	〇、三〇	
七等	〇、五八	〇、一四	
八等	〇、四二		

第三十四課　成田山

流れる様な人波に誘はれて、金燈籠の角を荒町通に折れると、アスファルト鋪道の兩側には、二月の寒空をよそに今日こそかき入れ時と方々から集つた露店がずらりと軒を並べてゐ

る。思はず足をとめさせられるステッキ飴屋や、おもちや屋の店、色とりどりの花を集めて目を奪ふ花屋の店には、黒山のやうな人だかりである。その間を或は立ち止り、或は眺めていつか荒町通をぬけると、こゝからはさうした賣店もなく、善男善女は三々五々と連れ立つて町の西方にある成田山遍照院にいそぐ。

不動明王　右手に降魔の劍、左手に縛の縄を持ち背に火焔を負ふ佛像不動尊とも云ふ

此處遍照院は千葉縣成田山新勝寺の末寺であつて、明治十七年、開基及川照龍上人の意志によつて創立せられた。上人は宮城縣志津川町に生れ、若い時から非常に信心深く瀬戸物の行商をしながらも、常に不動明王の繪姿を荷の中にして、宿へ着くといつもそれを禮拜して居た。各國を巡つて新勝寺に來られた上人は、斷食一週間、不眠不休の立行等さまざまの荒行をされてますます人格を磨き上げられた。

遍照院は上人が是非この不動明王の教を信徒にも勸めたいといふお考へから建てられたものである。しかし當時上人は僧侶の籍になく、行者の地位にあつたため、第一代の住職は新勝寺より迎へられた。上人は其の後の住職となり、いよ〳〵寺の發展を計つて、六十餘歳を一期に大往生をとげられた。

上人のひろめられた信者は岩手・山形・福島・茨城・群馬・鳥取・東京の各府縣にわたり、其の數は十餘萬の多きに及ぶといふ。實に上人の功績偉大なりといふべきであらう。

境内の雑踏にもまれて石壁の參道をゆくと、本堂の脇に大きな上人の銅像が見られる。上人の德を慕ふ信者によつて建てられたものである。

成田山の行事は正月十四日の大田原信者の參詣をはじめとして、今日正月二十八日の不動市があり、節分會の追儺式には豆まきが行はれる。七月二十八日には青年主催の盆踊があり、十月十五日には入佛記念の大般若轉讀法要が營まれる。これらはすべて舊暦で行はれ、その都度當山は善男善女の群に非常な賑ひを呈する。

轉讀　六百卷の大般若經を全部讀むことは出來ないから最初だけ唱へあとは唯ばらばらと繰つてしまふ
苟も　かりそめにも
資本　元手の金
店舗　店
什器　日用の道具
種苗　種子や苗
固定資本　動かない資産
流動資本　やりくりできる資産
生産事業　生産するしごと
貸附利息　金をかして利

第三十五課　金融の話

如何なる種類の營業を問はず、苟も事業を經營せんと思へば必ず事業に相當する資本が要る。商業を始めるにも先づ店舗の設備費、商品の仕入代・什器代等、或は又農業を經營せんと思へば家屋・耕地・農具等の固定資本から種苗・肥料等の購入に要する流動資本が是非共必要である。其他工業といはず、水産業といはず總て生産事業に先立つものは資本である。かやうに事業經營に必要な資本は利息を支拂ふ約束にて多くの人達より金を預り、同時に預かつた金は貸附利息を徴收して事業

融通（息をとること やりくりする）

需要者（必要とする人）

特權（特別の權利）

主要（大切な）

預金（金を預る）

貸附（金をかす）

爲替（金を送る方法）

經營者に融通するのである。之を金融といひ、之を行ふ設備を金融機關といふ。言ひ換へれば金融機關とは廣く資金を集めて之を資金需要者に融通する仲介所である。其代表とも云ふべきものは銀行である。銀行の中には中央銀行の樣に貨幣を發行する特權を有するものもあり、或は勸業銀行・興業銀行の如く特殊の金融を目的とするものもある。然し普通にいふ銀行は農工商業者の爲に資金を供給するものを指していふ。其他貯蓄銀行の如く貯蓄奬勵の爲に設けられ零細なる資金を貯蓄せしめ之を產業其他に融通する機關もある。大田原町の金融機關として第一に擧ぐべきは那須商業銀行である。その主要な業務は預金・貸附・手形の割引・爲替等であつて尙他人の依賴に應じて代金の取立・保護預り・手形の引受等も附隨して行ふ。

附隨（ついでに）

活發（すばやいこと）

貢獻（世のため人のためにつくす）

特徵（とりわけてよいところ）

發揮（あらはす）

便益（都合のよいこと）

出擧（金を貸す）

富豪（金持）

徵收（取り立てる）

奴婢（下男下女）

庶民（平民）

救濟（すくふ）

此等の業務は何れも多數の人より資金或は貴重品等を預り之を必要とする事業經營者に何時にても貸附融通の出來る如く準備しておくのである。此の準備金はやがて當町を中心に各方面に亘つて活潑に運用されて農工商業の進步發達の爲に貢獻するのである。其外に信用組合・無盡・賴母子講及質屋等も庶民の金融機關として夫々特徵を發揮して社會公衆の便益を計つてゐる。我が國に現はれた最古の金融方法は出擧の制度で奈良朝前後から平安朝にかけて廣く行はれたのである。卽ち政府・寺院又は富豪が一定の利息を徵收して貧民に資金を融通し、擔保として財產・奴婢を徵したのである。やがて鎌倉時代・德川時代となり庶民の救濟を目的とする賴母子講・無盡等生じ今日に於ては組織の改善によつて一層堅實な信用組合の發生を見るに至つたのである。信用組合は資金の餘

堅實（しっかりしてゐること、）　餘裕（ゆたかなこと）　相互扶助（互に助け合ふ）　時勢（時代の有様）　傾向（かたむき）　零細（僅かの）　經驗（見たり聞いたりする）　運用（はたらかせもちひる）　講員（仲間）　役目（はたらき）　自治體（自治して行く公の團體）　設置（もうける）　抵當（ひきあて）　急場（さしせまつた場合）

裕ある人より預かつた金を資金を必要とする人に融通して互に助け合はふとする相互扶助の組合である。從つて今日の時勢には最も相應しい金融機關として利用され益々發展の傾向を示してゐる。尙其外に零細なる資金貯蓄の方法として賴母子講・無盡等で俗に日掛又は月掛と云ひ我々が日常經驗する所である。卽ち毎日或は毎月一定の金額を貯蓄して金錢上の必要に迫られた時に融通資金として之を運用し講員相互の便益を計る組織である。以上述べてきた外に庶民の金融機關として直接重要な役目を果すものに尙質屋及び金貸業がある。昭和十年四月大田原にも地方自治體の組織によつて公益質屋の設置を見るに至つた。此の金融機關は物品を抵當として小額の資金を融通して急場の用を辨ずるのである。從つて商工業の資金としてよりも寧ろ我々の日常生活に必要な資金を得る爲に卽刻利用されるのである。

卽刻（そのときすぐ）　惠心僧都（學問の深い僧で澤山の著書がある。）　繪（彫刻に巧で、繪画には國寶になつてゐるものがある）

第三十六課　藥師堂

藥師堂は瑠璃堂ともいふ。本尊藥師如來は惠心僧都のつくつた高さ三十センチメートルばかりの木像である。今から約五百六十年前、新田義貞の子義興の家來、舟田貞正が陸奥に出陣の時に持つて來て下町の今の場所へ安置したのださうである。それを大田原の領主が本堂を建立したが、その後火災により燒失したので再建されたのが現在の本堂である。

堂の周圍に緣を廻らし壁には繪馬がたくさんかけてある。緣日は四月八日で、此の日は朝から夜まで參詣人が非常に多い。

境内は非常に廣い。參道附近には大小種々の燈籠が苔むして立並んでゐる。

辨財天
七福神の一

堂の前に二かゝへもある大きな公孫樹が一本、堂をかこむやうにして杉の木が十數本、何れももう古い木で蓊蒼と茂つてゐる。

堂の裏には大きな池があり、夏はあやめや花菖蒲が咲き、おもだかの葉が風にゆらぎ、その間を小魚が泳いでゐる。冬は一面氷がはりつめて子供達の樂しいスケート場となる。池の中程にある小さい島に辨財天を祀つた辨天樣とよばれる祠がある。

庭の杉の木立が涼しい蔭をつくり、廣い池が涼風を送つてくれるので、夏はこの境内に涼みがてら散歩に來る者が多く、子供達にとつてもよい遊び場所となつてゐる。

また盂蘭盆には、堂の前の廣場の中央に高い櫓をかけ、赤い提燈を幾つもともし、毎夜豊年踊が賑やかに行はれる。櫓の上

で樽をたゝき、聲自慢の若者が節面白く音頭をとれば下では若い人達がこれに和し丸く輪を描いて手ぶり面白く踊るのである。散歩と納涼とを兼ねて見に來る者が非常に多くいつも動けぬ程の人出となる。正門附近には露天商人がたくさん玩具屋・菓子屋・果物屋など店をならべ夜更まで賑はふのである。

藥師堂の境内は町の人達の遊園地としても適當な所である。

第三十七課　青年學校

「兄さん、今度小學校の門柱に、大田原町青年學校といふ大きな門標が掲げられましたね。あれは何ですか。」

「あれは今まであつた青年訓練所と補習學校とを合はせて新しく青年學校といふのが小學校内に生れたのです。」

「それには誰が入るのですか。」

「小學校を卒業して上級の學校や他郷に行かないで町内に住んでゐる青年男女がありませう。その人々は丁年（満二十歳をいふ）まで誰でも入學ができるのです。今度大田原町には男子のみであるが將來は女子の方も附設されることでせう。」

「それでは兄さんがよくお出かけになるのは青年學校ですか。」

「さうです。生徒は小學校でも中學校でも變りはない。身も心もよく鍛へて、少しでもよい日本人になる考へだ。」

「學校となれば授業料を納めるのでせう。」

「いや取らない。大田原町では今年あたりから生徒服や帽子まで補助（ほじょ）して奨勵してゐる程だ。外の青年學校でも授業料を取つた話は聞かないね。」

「今頃服や帽子を補助して下さる學校といふのは、初めて聞きましたが、それ程にしてやる必要があるのですか。」

「必要は大ありなのです。今年當町の小學校を卒業した人數は、尋常科と高等科で四百四十六人で、其の中中等學校に進んだ者は僅か六十三人ださうです。後の人々は家の手傳やそれぞれ實務に就いた人だ。大田原町の將來を背負ふ大多數の者が大切の時期に勉強を怠るといふことは恐るべき結果になるからだ。」

「さう言へば世界無比の農業國であるデンマークの繁榮は中堅たるべき青年大衆の教育によつてなされたと先生がおつしやいました。」

「よく覺えてゐましたね。その通りです。」

「これは日本のどこでもやるのですね。」

「國の規則で或る一部分を除いた外は實施するわけです。この

補助
手傳

出稼（短期間よそへ行つて働く）

青年教育を受くべき者が、年々五百萬人あるといふ。その爲に一萬八千五百九十五の青年學校が建つ見込ださうです。さうなれば東京などへ奉公や出稼に行つても其處で教育を受けられるわけだ。」

「そんなに長い間學校に行つては家の仕事が出來なくなるのではありませんか。」

「晝間は家で働き、月に何回か夜學に出るだけのことである。又修業年限や教育內容及時數等は土地の情況に依つて自由な組織になつてゐて普通の學校と違ふのです。入學資格や中途入學等も嚴格な制限がなく都合よくなつてゐますから心配はない。」

「晝間働いて夜の學校では大へんですね。」

「いや、そこに心身の鍛錬があるのだ。それでこそ熱心にもなる

し、艱難にも打克ち進んでは勞務の苦手も克服して益々發展することになる。」

「いつか父が今の時世は昔と違つて大へん便利だとおつしやつたが成程有難い世の中ですね。」

第三十八課　氷切り

「ザツク〳〵〳〵」

寒い杉の森や見上げるばかりの崖に吸ひ込まれる樣に響いてゆく幾つもの鋸の音は、蛇尾川の邊りにある製氷池の氷を切る音である。

幾つにも仕切られた廣い製氷池。見るからに氣持のいゝ氷が張りつめてゐる。其の氷を倉に積み込む眞最中だ。鋸は本當に大きい。氷を切る人は十人位だ。

胸のすく樣な鋸の音を立てゝ、みんな同じ方に頭を向けて働

いてゐる。縱百糎横五十糎位の氷が水の上に澤山浮き沈みしてゐる。切る後から後から岸へ寄せて大きな鉤で搔き上げる。

池の緣から竹のレールが倉の前まで敷かれてある。其のレールの上を厚い氷を二つも三つもつないで後から尖つた金のついた棒で押して行く。氷は滑る〳〵。輕い音を立てゝ滑る。中には二人位で力一杯押すと氣持のいゝ音を立てゝ滑り、三度位押すともう倉の前へ來てしまふのもある。又後から押して來る。きりなしに運んでゐる。時には切り方、搔き上げ方が間に合はない。レールの兩側には屑氷だの惡い氷が山をなしてゐる。まるで氷の國へ行つた樣だ。慣れない者は危くて歩くことも出來ない。

こゝで働いてゐる人達は大人もゐれば子供もゐる。大方ゴムの長靴を履いて足の冷たくならない樣にしてゐる。四十人位ゐるが、誰一人として暇な者はない。よく〳〵切り方が間に合はないと倉の前で火を圍んで待つてゐる。

鋸の音は間斷なく響いて、働く人の調子を取つてゐる樣である。

聞けば氷を張らせるのには大變面倒なさうである。先づ水のきれいなのを選ばなくてはならないそして氷の上に木の葉が落ちると全部掃きとらなければならない。又雪が積れば雪掃きもする。風の日、雪の夜などは實に心配ださうだ。それで夜でも出掛けて手入れをする。丁度僕が見に行つた時は夜の手入れをして其の儘にして置いたのであらう。眞黑いカンテラが二米位の竿の先にぶら下つて、レールの側に立てゝあつた。石油が屑氷の上にたれていくらか色が變つてゐた。

氷が切れたので又一度に働き初める。歌ひながら出て行く

者もある。寒さうに頸を縮めてゆく人もある。馳けてゆく人もある。

人夫の去つた後には焚火の煙が倉の前の氷にからんで杉の中に消えてゆく。氷は倉の前にだん〳〵積まれる。二三日積み重ねておいた氷は互に凍りついて青味を帶びてゐる。倉にはもう棟にとゞく程積み重ねてあつた。

此の氷が夏になると僕等になくてならないものになる。

大田原町にはまだ人造氷が出來ないから、かうして冬のうちに貯へておかなければならないのかと思ひながら歸つた。鋸の音がまだ耳に殘つてゐる。

第三十九課　大田原の今昔

東北本線西那須野驛より自動車で約十分南に走ると縣北第一を誇る大田原町に達する。町に入る前に先づ目につくものは靜かな田園の中に瓦屋根を高く聳え立てた大田原中學校である。更に進むと街路樹こそないが荒町通は道路といひ軒を並べる商店といひ實に立派である。この荒町と丁字形をなし上町・仲町・下町が東西に通つてゐる。こゝも鋪裝道路で大小數多の商店が立並んでゐる。大手通には町役場があり、少し南に行くと小學校、更に南の町はづれには高等女學校があつて、登校時刻には人波をつくる。大田原停車場より南に向ふ通は寺町で電氣會社・病院・旅館・警察署等の建物が人目を引く。この外大久保町・榮町等があり、又各町をつなぐ道路が近頃完成されて非常に便利である。

交通機關としては東野鐵道・乘合自動車により東北本線と連絡し、黑磯・黑羽・小川・佐久山・矢板等にもそれ〴〵乘合自動車の便がある。又貸切自動車が殖えてきた。

娯樂場としては活動館があり、撞球場がある。東北の丘には鄕社大田原神社があり、西側は公園になつてゐてこゝから町を見下すと一望の下にをさめられる。

この立派な町を見る時、前室村當時の昔の面影を思ひ浮べるのにはあまりに發達し、あまりに樣子が變り過ぎてゐる。これまでには幾度かの變遷があつた。そして大田原と言ふ町の名も生れた當時からの名ではない。

大田原町の起りは前室村といつて、人家が僅か十六軒に過ぎぬ一小部落であつた。川上・印南・岡本・磯等の家がその當時より存する家で、これ等の家は龍體城の前方に建てられてあつたといふ。

この小部落の發展の基を開いたのは武藏國丹治の黨、武將大俵康清である。今より約四百二十餘年前に現在の金田村大字

町島地内に水口城を築いて康清より次清・高清と傳へ、資清の時天文十二年前室村に城を築いて移り、大俵を大田原の三字に改めたのである。これより武家屋敷が建ち商家が殖え、百姓が集り來つて淋しかつた前室村が急に發展し始めたのである。

こんな狀態にあつた前室村も次第に發展し現在の大田原町となつた。

今日の人口は約一萬一千七百餘人で戸數は約二千三百戸の大なる數を示してゐる。大田原町の今と昔とを比べ見ると偉大な發展をなして居ることに驚くのである。

第四十課　町民の覺悟

國民の力の限り盡すこそ
我が日の本の堅めなりける

こいふ明治天皇の御製が御座います。

今日程擧國一致して最善の力を盡くさねばならぬ時はありません。この任務の重大な時に生を享けてゐる私達は、絶えず自分の修養を勵み、一家の繁榮、一町の發展に力を致し、ひいては國家の隆昌に貢獻するやう覺悟をしなければなりません。

私達は町を愛するにも、町に盡くすにも先づ私達の町の何たるかを知ることが大切です。よく知ることは之を愛することであり、又之に報いることにもなるのであります。

私達の町は古來那須野の廣大なる自然的環境の影響を受けて今日に及んでゐる故に、道德上秀れてゐる點が頗る多いのであります。即ち協力一致の精神に富み、家名を尊び、體面を重んずるの觀念强く、又質朴にして人情に厚く、同情謝恩の念篤く、從順にして勞働を嫌はぬ等幾多の長所を擧げることが出

來るのであります。

しかしながら、又永くこの自然的環境に生活する爲鄕土に執着し父兄又は家產に依賴するの念深く、從つて自立自營の氣象に乏しく、新に己の地步を開拓し事業を經營するといふ進取的の氣力に缺けて居るのであります。又人情に囚はれて、過去を懷ひ舊習を墨守して引込思案となり、言語粗雜、行動緩漫等に傾く嫌があります。であるから、私達は先づ自分の人格を十分に尊重して、自立自營の精神と進取の氣象とを盛んにして、又自分のなすべきことをなして、自ら滿足するの精神を養ふ樣にしなければなりません。

私達はどこまでも固有の美點長所は增々之を伸し、又他の長所は速かに採り入れて以て採長補短をなし、益々改善して、大市民としての資格を養はなければなりません。

私達の町は、實に資源豊富なる那須野の中心地であります。而も西に東北本線あり、北部には東野線等の交通機關あり東には蛇尾川を隔てゝ金丸原陸軍演習地があつて實に將來有望の土地であります。けれども一朝一夕に開發せられるものではありません。目的を大所高所に置き、堅忍持久一意專心孜々として倦まない覺悟を致さねばなりません。

畏くも

今上陛下に於かせられては、私達の住むこの那須野原をいたく愛でさせられ、しば〳〵行幸の光榮に浴して居るのであります。これ誠に郡民の榮譽ばかりでなく、郡下中樞都市である私達町民の無上の光榮であると申さねばなりません。それでありますから一致團結日夜精勵以て至誠奉公の實を擧げ聖恩の万分の一に報いる樣覺悟を致さねばなりません。

昭和十年十一月一日印刷
昭和十年十一月十一日發行

（非賣品）

不許複製

發行所　栃木縣大田原尋常高等小學校
發行者　栃木縣那須郡大田原町三三五　鈴木陽吉
印刷者　栃木縣那須郡大田原町三三五　飯村誠
印刷所　大田原活版所

終